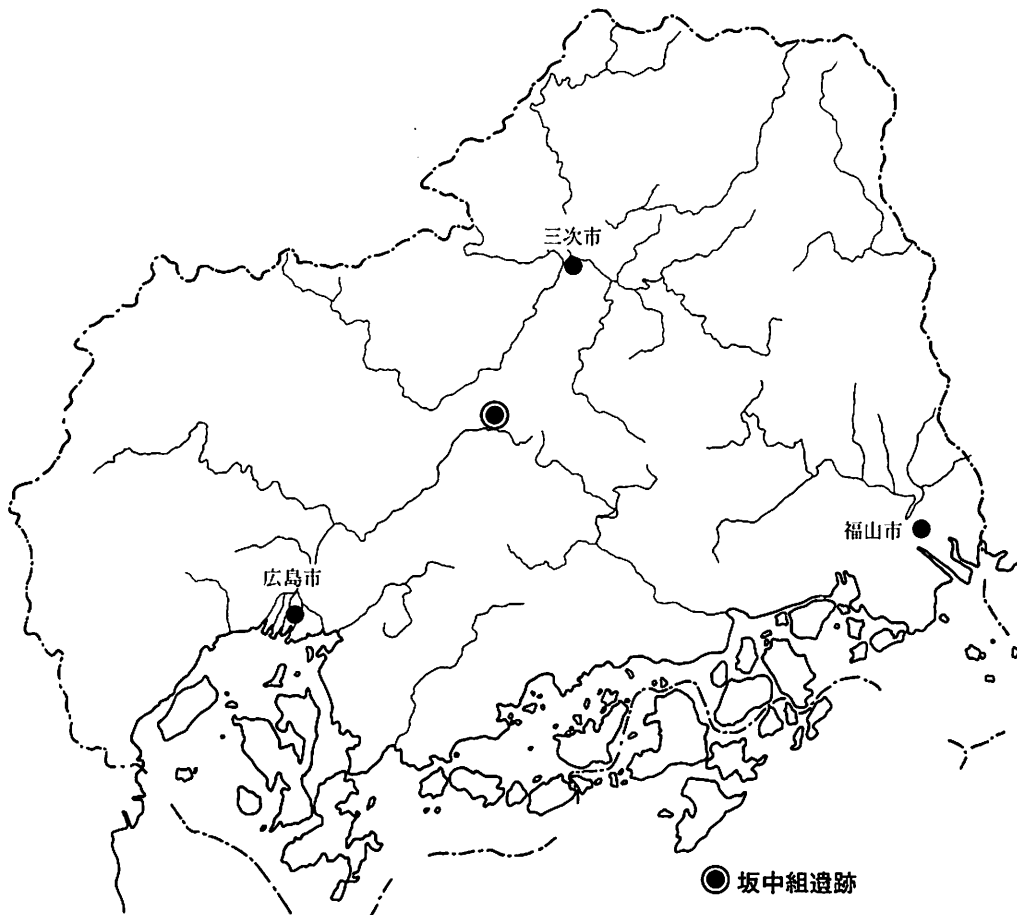


# 坂中組遺跡

2001

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター


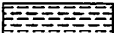
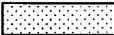
# 坂中組遺跡



2001

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

# 例 言

1. 本書は、1999年度と2000年度に発掘調査を実施した県営ほ場整備事業（向原地区）に係る坂中組遺跡（広島県高田郡向原町坂1972番地ほか）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島県可部農林事務所・広島県教育委員会からの委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査は、1999年度は橋坂久己、三好和弘（現 佐伯町立佐伯中学校）が、2000年度は橋坂、沢元保夫、片岡由起子が担当した。
4. 出土遺物の実測及び写真撮影は、橋坂・三好・片岡が行った。
5. 本書の執筆・編集は片岡を中心に行った。
6. 本書に使用した遺構の表示記号は次のとおりである。  
SB：建物跡      SK：土坑      SX：性格不明の遺構
7. 遺構図のスクリーントーンは  が焼土、 が炭化物の分布範囲を示し、 が礫の範囲を示している。
8. 本書に示した遺物実測図の断面は、次のとおり表現した。  
須恵器：黒ヌリ      陶磁器：アミ目      その他：白ヌキ
9. 挿図の遺物番号と図版の遺物番号は同一である。
10. 第1図は、建設省国土地理院発行の1：25,000の地形図（安芸吉田）を使用した。
11. 本書に使用した方位は、第2図が平面直角座標第Ⅲ系北、ほかはすべて磁北である。

# 目 次

I はじめに .....	1
II 位置と環境 .....	2
III 調査の概要 .....	5
IV 遺構と遺物 .....	7
V ま と め .....	48

## 插图目次

第1图	周边遗迹分布图 (1:25,000)	3
第2图	遗迹周边地形图 (1:2,000)	6
第3图	A-1区遗构配置图 (1:200)	7
第4图	SB1实测图 (1:60)	8
第5图	SB2实测图 (1:60)	9
第6图	SB3·4实测图 (1:60)	11
第7图	SB5, SX1实测图 (1:60)	12
第8图	A-2区遗构配置图 (1:200)	13
第9图	SK1·2实测图 (1:30)	14
第10图	SK3·4实测图 (1:30)	15
第11图	SK5·6实测图 (1:30)	16
第12图	A区出土遗物实测图 (土器1:3, 石器1:2)	18
第13图	A区出土遗物实测图 (土器1:3, 石器1:2)	19
第14图	B-1区遗构配置图 (1:200)	20
第15图	SK7~10实测图 (1:30)	21
第16图	SK11实测图 (1:30)	22
第17图	SK12实测图 (1:30)	23
第18图	B-2区遗构配置图 (1:200)	23
第19图	SB6实测图 (1:60)	24
第20图	SK13~15实测图 (1:30)	25
第21图	SK16~21实测图 (1:30)	27
第22图	SK22实测图 (1:30)	28
第23图	SX2·3实测图 (1:30)	29
第24图	SX4实测图 (1:30)	30
第25图	B-3区遗构配置图 (1:200)	31
第26图	SK23·24实测图 (1:30)	32
第27图	B区出土遗物实测图 (1:3)	33
第28图	C区出土遗物实测图 (1:3)	34
第29图	D区遗构配置图 (1:200)	35
第30图	SK25实测图 (1:30)	36
第31图	D区出土遗物实测图 (土器1:3, 石器1:2)	36
第32图	E区遗构配置图 (1:100)	37
第33图	SX5·6, SK26断面图 (1:60)	38

第34図	E区出土遺物実測図(1:3).....	38
第35図	F区遺構配置図(1:100).....	39
第36図	F区東半部実測図(1:60).....	40
第37図	F区出土遺物実測図(土器・砥石1:3, 石鏃1:2).....	44
第38図	F区西半部実測図(1:60).....	45
第39図	F区出土遺物実測図(土器1:3, 石鏃1:2, 砥石1:4).....	47

## 図 版 目 次

図版 1 a	S B 1 遺物出土状況 (北東から)	図版 9 a	S K 16・17 完掘(南から)
b	S B 1 出土遺物(西から)	b	S K 18 完掘(南西から)
c	S B 1 完掘(北東から)	c	S K 19・20 完掘(北から)
図版 2 a	S B 2 土層断面(北から)	図版 10 a	S K 22 検出状況(北から)
b	S B 2 完掘(南から)	b	S K 22 土層断面(北から)
c	S B 3 完掘(西から)	c	S K 22 桶検出状況(北から)
図版 3 a	S B 4 完掘(南から)	図版 11 a	S X 2 完掘(南西から)
b	S B 5, S X 1 完掘(南から)	b	S X 3 完掘(東から)
c	S B 1~4 完掘(北から)	c	S X 4 完掘(北東から)
図版 4 a	A-2区全景(北から)	図版 12 a	S K 23 完掘(南から)
b	S K 1 完掘(東から)	b	S K 24 完掘(北西から)
c	S K 1 遺物出土状況 (北東から)	c	B-3区柱穴遺物出土状況 (北から)
図版 5 a	S K 2・3 完掘(北から)	図版 13 a	C区全景(南から)
b	S K 2~5 完掘(東から)	b	作業風景
c	A-3区全景(南から)	c	遺跡見学風景(向原小学校)
図版 6 a	B-1区全景(北から)	図版 14 a	D区全景(北から)
b	S K 7~9 完掘(南東から)	b	S K 25 検出状況(南から)
c	S K 10 完掘(東から)	c	S K 25 完掘(南から)
図版 7 a	S K 11 完掘(南西から)	図版 15 a	E区東半部礫検出状況 (北西から)
b	S K 12 完掘(南から)	b	S X 6 断面(南から)
c	B-2区全景(北から)	c	S X 6 完掘(南から)
図版 8 a	S B 6 完掘(北から)	図版 16 a	S X 5 礫検出状況(北から)
b	S B 6 柱材検出状況(東から)	b	S X 5 断面(西から)
c	S K 13~15 完掘(北東から)	c	S X 5 完掘(南から)

図版 17 a SK 26 完掘 (南から)

b SK 27 完掘 (北から)

c E区全景 (東から)

図版 18 a SB 7 貼床検出状況 (南から)

b SB 7 炉跡土層断面 (東から)

c SB 7 完掘 (東から)

図版 19 a SX 7 完掘 (北から)

b SB 8 完掘 (南から)

c SB 9 土層断面 (東から)

図版 20 a SB 9, SX 8 土層断面

(北から)

b SB 9, SX 8 完掘 (西から)

c SB 9, SX 8・9 完掘

(西から)

図版 21 a SX 9 完掘 (西から)

b SB 10 完掘 (南から)

c F区全景 (東から)

図版 22 A区出土遺物

図版 23 A・B区出土遺物

図版 24 C～F区出土遺物

# I はじめに

坂中組遺跡の調査は、県営ほ場整備事業（向原地区）に係るものである。広島県可部農林事務所（以下「可部農林」という。）は1984（昭和59）年4月、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と本事業における文化財等の有無及び取扱いについて協議を行った。県教委はこれを受けて現地踏査を行い、1985年2月、試掘調査が必要な地点が7か所ある旨を可部農林へ回答した。このうち1998（平成10）年、向原町教育委員会（以下「町教委」という。）は県教委の協力のもとに要試掘地点（中組地区）の試掘調査を行い、坂中組遺跡（23,390 m<sup>2</sup>）を確認した。

県教委と町教委及び可部農林が遺跡の取扱いについて協議した結果、ほ場部分は盛土保存し、現状保存が不可能な道・水路部分の1,850 m<sup>2</sup>について、2年次に分けて（1,300 m<sup>2</sup>と550 m<sup>2</sup>）調査を行うことになった。

これを受けて可部農林は翌年1,300 m<sup>2</sup>分について県教委に調査を依頼し、県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が実施することが適当であるとした。これを受けてセンターは、1999年4月19日付けで文化庁長官あてに「埋蔵文化財発掘調査の届出」を提出し、発掘調査を5月24日から9月3日までの期間実施した。8月21日には、町教委との共催で遺跡報告会を開催し、約100名の参加があったほか、調査期間中には、向原町立向原中学校生徒・向原町立向原小学校児童の見学などもあった。

残る550 m<sup>2</sup>について、可部農林はセンターに発掘調査を委託し、2000年3月27日付けで文化庁長官あてに「埋蔵文化財発掘調査の届出」を提出し、4月10日から5月27日までの期間調査を実施した。なお、5月27日には町教委との共催で遺跡報告会を開催し、約110名の参加があった。

発掘調査の経費は、農林省構造改善局と文化庁長官の覚書「文化財保護法の一部改正に関する覚書」5に基づき、可部農林が事業者負担分80%を、文化庁からの補助金を受けた県教委が20%を負担した。

本書は、以上のような経過で行われた坂中組遺跡の2年次にわたる発掘調査の成果をまとめたものである。今後、埋蔵文化財の研究資料として、また、この地域の歴史を明らかにしていく一助となれば幸いである。

発掘調査にあたっては、広島県可部農林事務所高田地方農村整備事業所、向原町土地開発公社、向原町教育委員会、元向原町教育委員会社会教育指導員 井上沖彦氏及び地元の方々の多大な御協力をいただいたほか、出土した石材については考古地質学研究所 柴田喜太郎氏に御教示をいただいた。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

## Ⅱ 位置と環境

坂中組遺跡の所在する高田郡向原町は、広島県のほぼ中央部にあたる。面積の約八割が山林で平地は少ないが、古くから出雲街道や三原往還の通る交通の要衝であった。現在の水系は、三篠川が東から西流し町の中央部より南西に流れ、太田川と合流して瀬戸内海に、戸島川が町の北部を北東に流れ、江の川と合流して日本海にそれぞれ注いでいる。1万年以上前の三篠川は戸島川として江の川に合流していたが、三篠川による浸食が進んだ結果（河川争奪）、現在のような水系となっている。本遺跡は、三篠川に向かって緩やかに傾斜する扇状地状の地形に立地しており、南側の県道沿いには三篠川の段丘崖がみとめられる。

町内には数多くの遺跡がみられ、古くから人々の生活に適していたことが窺われる。以下、歴史的環境について発掘調査が実施された遺跡を中心に概観していきたい。

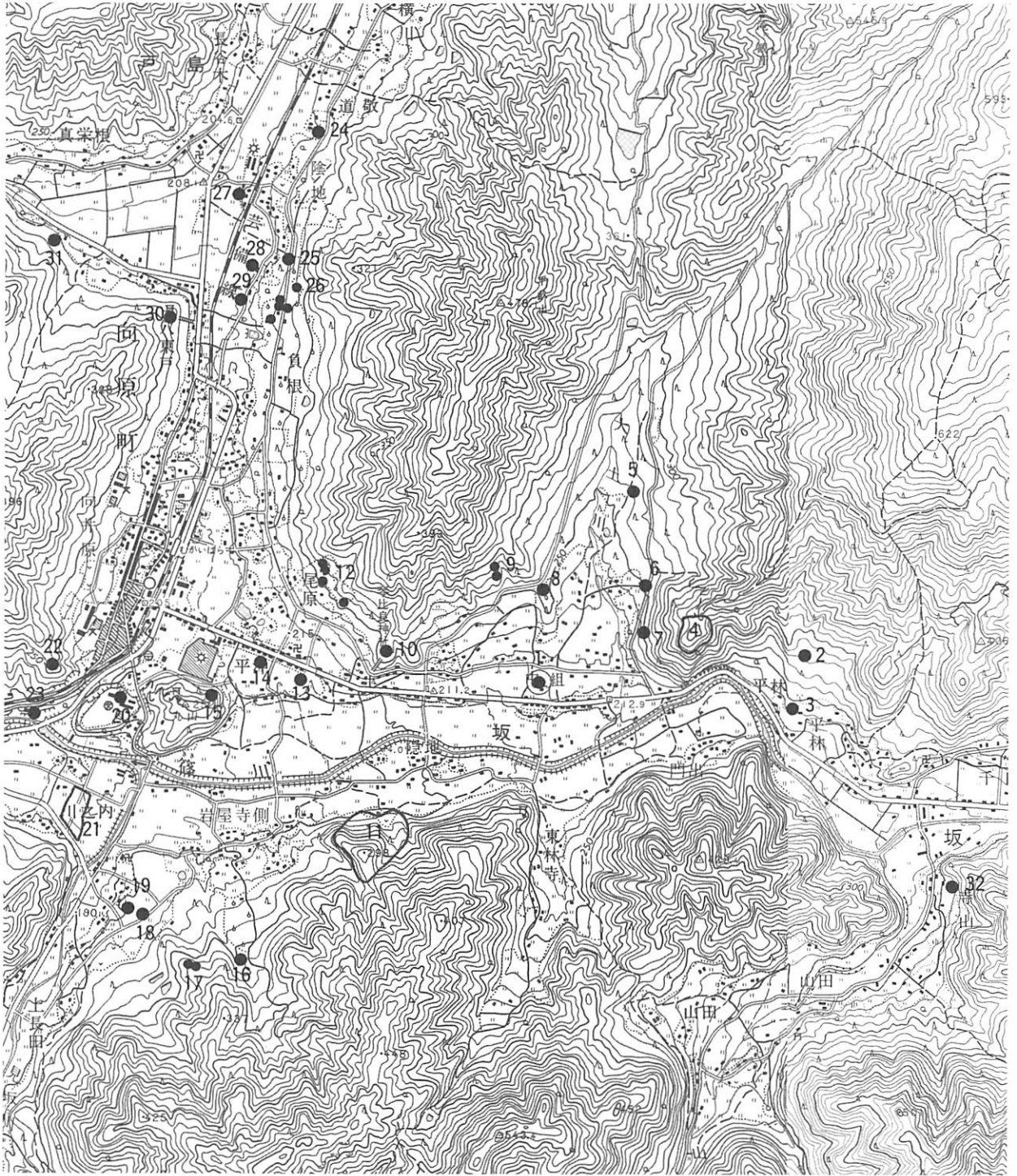
縄文時代以前の遺跡はまだ明らかになっていないが、縄文時代については、今回の調査で初めて後期の土器片と石鏃が出土している。

弥生時代は、前期の遺跡は未確認であるが中期以降になると少しずつ遺跡が確認されている。佐山天岩岩遺跡（坂）では弥生時代中期後半のものと思われる壺形土器が出土している。後期になると遺跡の数が増え、琴比良神社裏で箱式石棺が確認されている国貞山遺跡（坂）や弥生時代後期の土器片が出土している長田中組遺跡（長田）<sup>(1)</sup>・上滝川1号遺跡<sup>(2)</sup>などがあり、周辺で集落の存在を窺うことができる。

古墳時代に入ると遺跡の数が増加し、当町域には約100基の古墳が存在している<sup>(3)</sup>。そのうち前半期の古墳とされるものは、竪穴式石室を内部主体とする松尾古墳（長田）、小丸子第4号古墳（長田）、箱式石棺を内部主体とする負根古墳群（戸島）などがある。後半期は横穴式石室を内部主体とするものが多い。本遺跡のある坂地区には、三篠川の北側に尾原古墳群、中組古墳、城山下古墳、千間塚古墳<sup>(4)</sup>、水野内千間塚古墳<sup>(5)</sup>、余京地中古墳、余京地下古墳などがあり、三篠川の南側におんぼん古墳群、岩屋地古墳などが確認されている。なかでも千間塚古墳は、鳥形瓶・環状瓶（東京国立博物館所蔵）など特異な形態の須恵器が出土しており、築造時期は7世紀中葉頃と考えられている。また水野内千間塚古墳は、江の川流域にみられる、石室に玄門立柱を使用しているタイプである。古墳に対して集落遺跡は数が少なく、副冨遺跡<sup>(6)</sup>（長田）で掘立柱建物跡や土坑・溝が確認されているが、これらのうち数棟が後期頃に推定される。また、ほ場整備に伴って試掘で確認された養光地遺跡（長田）がある。

古代では寺之下遺跡<sup>(7)</sup>の発掘調査で、主に掘立柱建物跡（8棟）や竪穴住居跡（2軒）が確認されている。中世の建物跡であるSB9以外は奈良時代から平安時代にかけてのもので、掘立柱建物跡の配置や構造などから官衙関連施設の可能性は薄く、豪族の居館跡ではないかと推定されている<sup>(8)</sup>。正敷田遺跡（長田）からは、単弁蓮華文の弁の部分に火炎文が施された軒丸瓦が出土しており、7世紀後半から8世紀前半の寺院跡と推定され<sup>(9)</sup>、同様の瓦が出土した吉田町の明官地廃寺跡との関連性が考えられる。また、長谷山の中腹で礎石が確認された旧門明寺跡（長田）





第 1 図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

- |                |            |          |              |
|----------------|------------|----------|--------------|
| 1 坂中組遺跡        | 2 余京地中古墳   | 3 余京地下古墳 | 4 久志城跡       |
| 5 水野内千間塚古墳     | 6 千間塚古墳    | 7 城山下古墳  | 8 中組古墳       |
| 9 大寺山第 1・2 号古墳 | 10 国貞山遺跡   | 11 日下津城跡 | 12 尾原古墳群     |
| 13 寺之下遺跡       | 14 尾原遺跡    | 15 丸山東古墳 | 16 岩屋地古墳     |
| 17 おんぱん古墳群     | 18 田中遺跡    | 19 副免遺跡  | 20 丸山西古墳     |
| 21 正敷田遺跡       | 22 高大地古墳   | 23 高大地湊跡 | 24 陰地古墳      |
| 25 負根北古墳       | 26 負根古墳群   | 27 中之通遺跡 | 28 地加清 2 号遺跡 |
| 29 地加清 1 号遺跡   | 30 鳴石山神社古墳 | 31 塚之本古墳 | 32 寺山古墓      |

からは布目瓦の破片が出土しており、平安時代の山岳寺院の存在も指摘されている<sup>(10)</sup>。

鎌倉時代になると、武士の台頭に伴って既存の荘園がしだいに衰退し、平家滅亡（1185年）や承久の乱（1221年）の後、高田郡内にも地頭が置かれ、武士団が入部し鎌倉時代から室町時代を通じて在地領主化が進んだ。坂には坂氏（日下津城）、有留に有富氏（古吹城）、長田に内藤氏（田屋城）など、いずれも戦国時代になって台頭する毛利氏と関わりが深い在地領主が存在しており、これらに關係する寺跡や城跡などが伝承されている。また寺山古墓、掘立柱建物跡や井戸跡などが検出されている地加清1号遺跡（戸島）<sup>(11)</sup>・平木遺跡（戸島）<sup>(12)</sup>、小規模な集落跡で掘立柱建物跡や溝状遺構が確認されている上滝川1号遺跡（戸島）がある。寺之下遺跡（坂）では、4間×2間に四面庇を備えている構造の大規模な総柱の掘立柱建物跡が確認された。規模は6間×4間（16.2m×9.6m）で庇部分の一部の柱穴を除き、根石が認められている。これらのことから、鎌倉時代以降の建物跡で寝殿造の可能性も考えられている。<sup>(13)</sup>

江戸時代の遺構としては、籠を埋めた土坑が確認されている尾原遺跡（坂）<sup>(14)</sup>、麻釜と麻釜に伴う柵列と作業小屋が確認されている副免遺跡（長田）、さらに三篠川で川舟による運搬の基点として栄えた高大地湊跡（長田）などが知られ、現在、高大地湊跡は景観復原されている。

## 註

- (1) 向原町教育委員会『長田中組遺跡』 1992年
- (2) 財団法人広島埋蔵文化財調査センター『上滝川1号遺跡』 1993年
- (3) 広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅳ（高田郡）』 1997年
- (4) 小都 隆「千間塚古墳」『探訪・広島古墳』芸備友の会 1991年
- (5) 向原町誌編纂委員会「原始・古代の向原」『向原町誌』上巻 向原町 1992年
- (6) 向原町教育委員会『副免遺跡』 1996年
- (7) 財団法人広島埋蔵文化財調査センター『寺之下遺跡』 1998年  
向原町教育委員会『寺之下遺跡』 1999年
- (8) 中村 尚「郡衙所在地についての一考察—高田郡衙を中心に広島県の郡衙所在地を考える—」『研究輯録Ⅶ』財団法人広島埋蔵文化財調査センター 1998年
- (9) 註(5)に同じ
- (10) 向原町誌編纂委員会「文化財調査資料（名勝・旧蹟）」『向原町誌』下巻 向原町 1989年
- (11) 向原町教育委員会『地加清1号遺跡』 1995年
- (12) 向原町教育委員会『平木遺跡』 1992年
- (13) 註(7)に同じ
- (14) 財団法人広島埋蔵文化財調査センター『寺之下・尾原』 1999年

\* 遺跡の名称は、広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅳ（高田郡）』 1997年 による。

## 参考文献

- 高田郡町村会『高田郡史』上巻 1972年  
竹内理三編『角川日本地名大辞典』第34巻 広島県 角川書店 1987年

### Ⅲ 調査の概要

本遺跡周辺は、標高 220 m 前後の階段状の水田になっており、過去幾度かの水田造成のため地形の改変が行われ、遺構の保存状況は良好ではなかった。

調査区は、1999 年度調査区域を西から A・B・C 調査区とし、2000 年度調査区域を D・E・F 区とした。また、A・B 調査区は北側から 1～3 区に分けた。

調査区内の土層は、黒褐色粘質土（耕作土）・茶褐色土・茶灰褐色土（床土）・黒褐色粘質土（流入土）・淡褐色粘質土（遺構面）の順に堆積していた。層序は斜面の下側でやや厚くなるものの、水田の床土（茶褐色土・茶灰褐色土）を除去すると直ぐに遺構検出面となる。

遺構は調査区範囲の関係上、調査区外に広がるものが多く、全容をつかめないものが多い。

調査の結果、竪穴住居跡 9 軒、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 28 基、性格不明の遺構 9 基、小土坑群などを検出した。出土した遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・陶磁器の破片、石器、砥石などである。各調査区で確認した遺構・遺物は次のとおりである。

- A-1 区 竪穴住居跡 5 軒（SB 1～5）、性格不明の遺構 1 基（SX 1）を確認した。SB 1～3 は円形で、そのうち SB 2 は径約 5.0 m、4 本の柱をもつ。SB 1・2 は、出土した遺物から弥生後期のものと考えられる。SB 3～5 は遺物が出土していないため、時期は不明である。調査区内からは弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器の破片、砥石などが出土した。
- A-2 区 土坑 6 基（SK 1～6）を確認した。SK 1 から石器が 7 点出土しており、縄文時代後期～弥生時代のものと考えられるが、性格は不明である。調査区内から弥生土器の器台の破片、石器の剝片、鉄器などが出土した。
- A-3 区 遺構は存在しなかったが、調査区内から土師器の甕、須恵器片などが出土した。
- B-1 区 2 層の遺構面（黒褐色粘質土・淡褐色粘質土）から、土坑 6 基（SK 7～12）を確認した。いずれの遺構も出土遺物が細片のため、時期や性格を特定することは難しい。調査区内から小型の磨製蛤刃石斧、須恵器・土師質土器・陶磁器の破片が出土した。
- B-2 区 掘立柱建物跡 1 棟（SB 6）、土坑 10 基（SK 13～22）、性格不明の遺構 3 基（SX 2～4）、小土坑群を確認した。SB 6 は、2 間×2 間以上である。柱穴には根石や詰め石、柱材が残っているものもあり、中世の可能性もある。また、周辺の小土坑群からは、土師質土器皿が出土している。SK 13 からは瓦質土器の播鉢が出土しており、時期はおおむね 16 世紀前後が考えられるが、性格は明らかではない。SK 22 は埋桶土坑で、底板を検出している。側板は検出できなかったが、まわりを漆喰でかためており、底面直上から青銅製の煙管が出土した。調査区内からは、須恵器・土師質土器・陶磁器片や石臼、鉄釘などが出土した。
- B-3 区 土坑 2 基（SK 23・24）、及び小土坑などを確認した。小土坑からは土師質土器皿が出土した。調査区内からは、須恵器・土師質土器・陶磁器の破片などが出土した。

- C 区 遺構は存在しなかったが、調査区内から縄文土器・弥生土器・須恵器片などが出土した。
- D 区 土坑1基（SK 25）、及び小土坑などを確認した。調査区内から弥生土器・須恵器・陶磁器片など幅広い時代の遺物が出土した。
- E 区 土坑2基（SK 26・27）と性格不明の遺構2基（SX 5・6）を確認した。調査区内からは、弥生土器・土師器・須恵器片などが出土した。
- F 区 竪穴住居跡を4軒（SB 7～10）、性格不明の遺構3基（SX 7～9）、土坑1基（SK 28）を確認した。SB 7は径が約6mの円形で、中央部に炉跡、その周囲に柱穴を5基確認した。時期は、出土した遺物から弥生時代後期中頃と考えられる。調査区内からは、弥生土器・土師器片、石製品などが出土した。



第2図 遺跡周辺地形図（1：2,000） アミ目は調査区・斜線は宅地

## IV 遺構と遺物

### 1 A-1区 (第3図)

A区は遺跡の南西に位置する調査区で、南北方向に3地点の調査区があり、北側からA-1区・A-2区・A-3区とした。A-1区の遺構面の標高は214～215mである。現在の地形も南北方向の斜面になっているが、土層の堆積状況から旧地形も同じように傾斜していたと考えられる。調査区の南半分は10～30cmの礫が堆積しており、この面で遺構は確認できなかった。北半分で検出した遺構は、弥生時代の竪穴住居跡5軒、性格不明の遺構1基である。遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器の破片、砥石などが出土した。

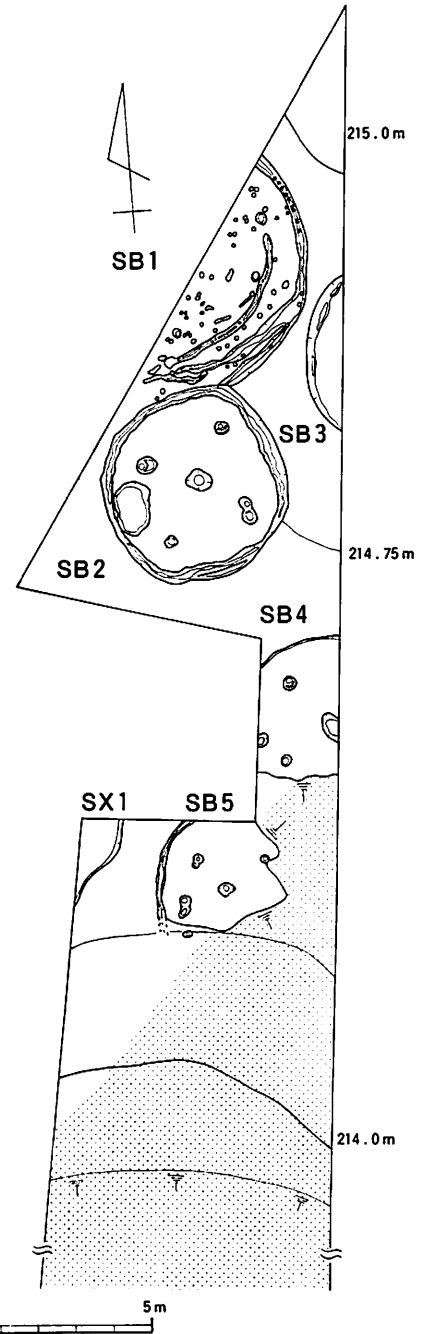
#### SB1 (第4図, 図版1a～c)

A-1区の北端に位置する。南東側のSB3と近接し、SB2とは南側で重複関係にある。南東側で壁溝が三重になっていることから建て替えがあったものと考えられ、もっとも外側から順にSB1a～1cとした。

平面形は西側の半分以上が調査区外になるが、現状から推定して円形の住居跡と考えられ、SB1aの検出面での規模は東西3.1m、南北5.7m、壁高(東壁)0.2mで、床面は径7.6m程度と推定される。壁溝は幅0.2～0.3m、深さ0.2～0.3mである。柱穴はSB1a～cの床面で4基確認された。SB1aの主柱穴は3基(P1・2・4)確認でき、復元すると6本柱構造と考えられる。柱穴の規模は、P1は径0.3m、深さ0.3m、P2は径0.2m、深さ0.3m、P4は径0.3m、深さ0.4mである。柱間距離は、P1～P2が2.0m、P2～P4が2.8mである。

SB1bの規模は東西2.8m、南北3.3mで、床面は径7.0m程度と推定される。壁溝は幅0.2～0.3m、深さ5～10cmである。主柱穴は3基(P1～3)確認でき、6本柱構造と考えられる。柱穴の規模は、P1は径0.3m、深さ0.3m、P2は径0.2m、深さ0.3m、P3は径0.2m、深さ0.4mである。柱間距離は、P1～P2が2.0m、P2～P3が2.3mである。

SB1cの規模は東西1.8m、南北2.2mである。床面は推定で径5.8m程度と思われる。壁溝は幅0.1～0.2m、深さ5cmである。主柱穴は確認できなかった。

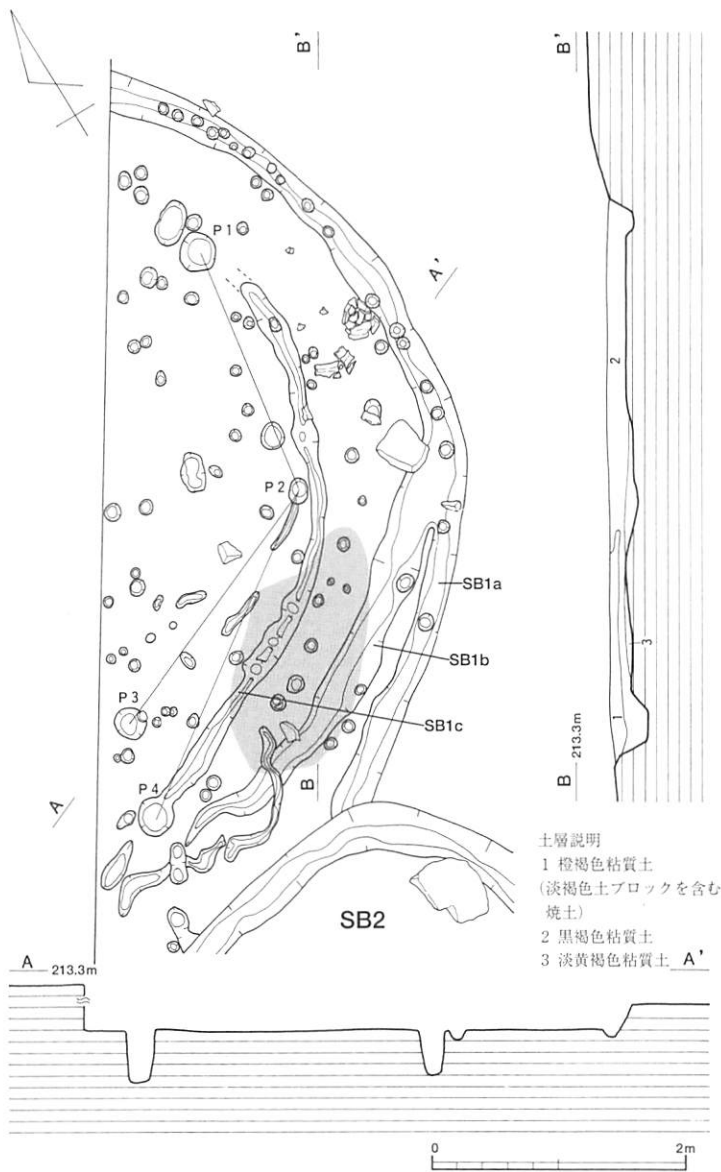


第3図 A-1区遺構配置図(1:200)

SB1a～cの壁溝底面から、径約10cmの小穴が多数並んで検出された。その一部は壁に差し込んだ板を留めた杭穴の可能性が考えられる。

また、SB1a・1bの壁溝から焼土及び炭化物を、SB1b・1cの埋土上層で焼土を確認した。土層にSB1b・1cの壁の立ち上がりが認められないことからSB1cが最も古く、SB1cは同心円状に拡張してSB1bとなっている。SB1aとSB1bは北側の壁を共有しており、南側部分のみ拡張していると考えられる。SB1a～1cの新旧関係は古い順にSB1c→1b→1aと考えられる。SB1a～cと南側で重複するSB2との新旧関係は土層では判断できなかったが、SB2の平面形が隅丸方形に近い円形であること、出土遺物が新しいことなどから、SB2が新しいと考えられる。

遺物は、SB1aの東側壁溝付近から弥生土器の甕(1・2)、砥石、堆積土から弥生土器片・須恵器片・土師質土器片が出土している。



第4図 SB1実測図(1:60)

#### 出土遺物(第12図, 図版22)

##### 弥生土器

甕(1～5) 1～3は口径が18.0～21.0cmと推定される大型の甕である。いずれも頸部が「く」字状に外反し、直立・やや外傾気味に立ち上がり端部に至っている。端部はつまみ上げによって上方へ拡張し、丸く終わっている。1は完形である。口縁部外面に4条の凹線が、頸部から肩部外面にはヘラ状工具による刺突文が施されている。胴部の最大径は中位よりやや上にあり径25.8cmである。底部はやや窪んでおり、径4.5cm、器高は31.3cmである。調整は口縁内外ともヨコナデ、胴部外面はハケ目の後、縦方向のヘラ磨き、成形は肩部内面が横方向、肩から中央付近が斜め方向のヘラ削りが残っている。底部から胴部中位まではヘラケズリの後、縦方向のハケ目が施されている。胎土は1～3mmの砂粒を多く含み焼成は良好である。

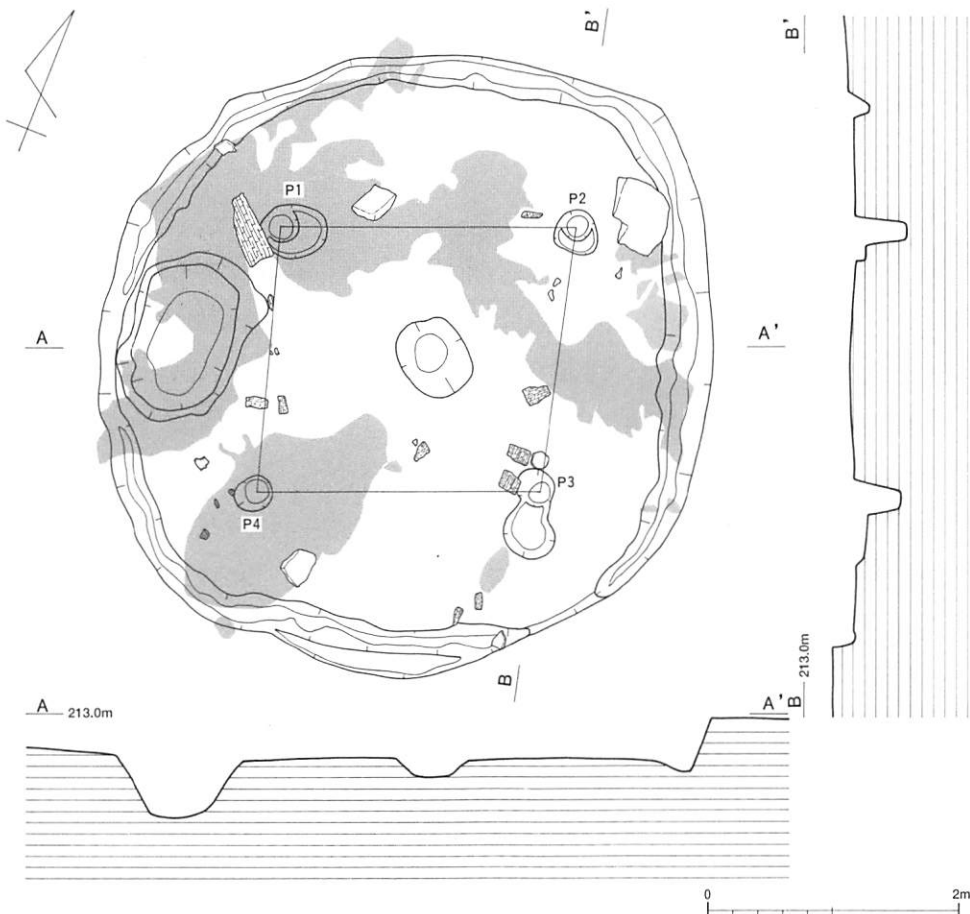
2は全体の3分の1の破片である。口縁部外面に2条の凹線が、肩部にはヘラ

状工具による刺突文が施されている。胴部の最大径は中位よりやや上にあり推定で29.9 cmである。調整は口縁内外ともヨコナデ、胴部外面はハケ目の後、部分的にヘラ磨きが施されている。肩部内面は横方向、下部は右下から左上へのヘラ削りである。胎土は1～5 mmの砂粒を多く含み焼成は良好である。3は全体の5分の1以下の破片である。口縁部外面に2条の凹線がある。調整は口縁内外ともヨコナデ、胴部内面の肩部は横方向のヘラ削りである。胎土は1～2 mmの砂粒を含み焼成は良好である。4は復元口径が12.6 cmの鉢で、全体の5分の1の破片である。口縁部外面に強いナデの痕がみられる。調整は口縁内外ともヨコナデ、体部外面は縦方向のヘラ磨き、内面は下から上へ縦方向のヘラ削りである。胎土は1 mm程度の砂粒を多く含み焼成は良好である。5は小片で、口縁部外面に2条の凹線がある。調整は口縁部外面がヘラ磨き、内面がヘラ削りである。胎土は1～3 mmの砂粒を含み焼成は良好である。

**S B 2** (第5図, 図版2 a・b)

A-1区の北側に位置する。北東1.4 mにS B 3があり, S B 1とは北側で重複関係にある。平面形は北側と東側がやや直線的であるがほぼ円形で, 規模は東西方向4.9 m, 南北方向5.1 m, 壁高は北壁で0.2 m, 東壁で0.2 mである。

床面は径約5 mで, ほぼ平坦である。壁溝は幅0.2～0.4 m, 深さ5～7 cmである。柱穴は主



第5図 S B 2実測図 (1 : 60)

柱穴が4基（P1～4）確認され、4本柱構造と考えられる。柱穴の規模は、P1は径0.4～0.5 m、深さ0.3 m、P2は径0.3～0.4 m、深さ0.4 m、P3は径0.3 m、深さ0.4 m、P4は径0.3 m、深さ0.3 mであり、P3以外は2段に掘り込まれている。柱間距離は、P1～P2が2.3 m、P2～P3が2.1 m、P3～P4が2.2 m、P4～P1が2.1 mである。

床面中央部に楕円形の土坑があり、規模は東西0.6 m、南北0.6 m、深さ0.2 mである。埋土から炭化物が検出されたことから炉跡と考えられる。

床面から15～20 cmの高さの位置で淡橙褐色粘質土の焼土及び炭化物が検出された。焼土の厚さは約5～10 cmで、主に北半部と南西部に集中している。炭化物は少量であったが、大きいものは54 cm×18 cmのものもあり、柱穴の近くから中央の炉跡に向いた方向で出土している。焼失住居の可能性も考えられるが、床面及び壁が焼けていないことや、堆積土の状況を見ると一度に流入していることから、その可能性は低いと考えられる。

南西側の壁際で土坑を検出した。平面形は楕円形で、規模は東西1.0 m、南北1.4 m、深さ約0.5 mである。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しておらず、用途は不明である。この土坑の埋土上層からも焼土が検出されていること、土坑の部分に壁溝がないことから、この土坑はSBに伴っていると考えられる。

SB1との新旧関係は、SB1の項で述べたとおりSB2が新しいと考えられる。

床面の北西壁付近や柱穴付近から二重口縁の壺の破片（6～9）が出土した。北東隅で検出した石は台石と思われる。

## 出土遺物（第12図、図版22）

### 弥生土器

壺（6～9） 4点すべて二重口縁の壺で、5分の1以下の破片である。6は復元口径が15.6 cm、頸部が大きく外反した後、やや直立気味に立ち上がり、端部は平らに終わる。口縁部外面に5条の凹線があり、内面は接合部分や端部付近まで指頭圧痕が残っている。調整は口縁内外ともヨコナデ、肩部内面は横方向のヘラ削りである。胎土は1 mm程度の砂粒を少し含み、焼成は良好である。7は口縁部～頸部の破片である。頸部で大きく外反した後、口縁部はやや内側に立ち上がる。端部は欠損している。口縁部外面に櫛歯状工具による波状文が施されている。内面の接合部分には指頭圧痕が残っている。調整は口縁内外ともヨコナデ、頸部外面は縦方向の細かいハケ目が残っている。胎土は1 mm程度の砂粒を少し含み、焼成は良好である。8は口縁端部を欠失している破片である。口縁部外面には凹線が3条以上あったと考えられ、頸部内面はカキ目状に条痕が残っている。外面には縦方向のハケ目が認められる。胎土は1 mm以下の砂粒を少し含み、焼成は良好である。9は口縁部がやや内側に立ち上がる。口縁端部外面には8条の凹線があり、調整は口縁内外ともヨコナデである。胎土は1 mm程度の砂粒を少し含み、焼成は良好である。



**SB3** (第6図, 図版2c)

A-1区の北側に位置する。北西0.3mにSB1, 南西1.4mにSB2がある。

東側が調査区外のため平面形は不明であるが, 残存している西側の形状から円形と考えられる。検出部分の規模は東西方向1.0m, 南北方向4.1m, 壁高は北壁で0.3m, 西壁で0.2mである。

床面は径5.3mと推定され, ほぼ平坦な床面の北西側で部分的に幅0.3m, 深さ7cmの壁溝が検出された。柱穴・炉跡は確認されなかった。

遺物は出土していない。

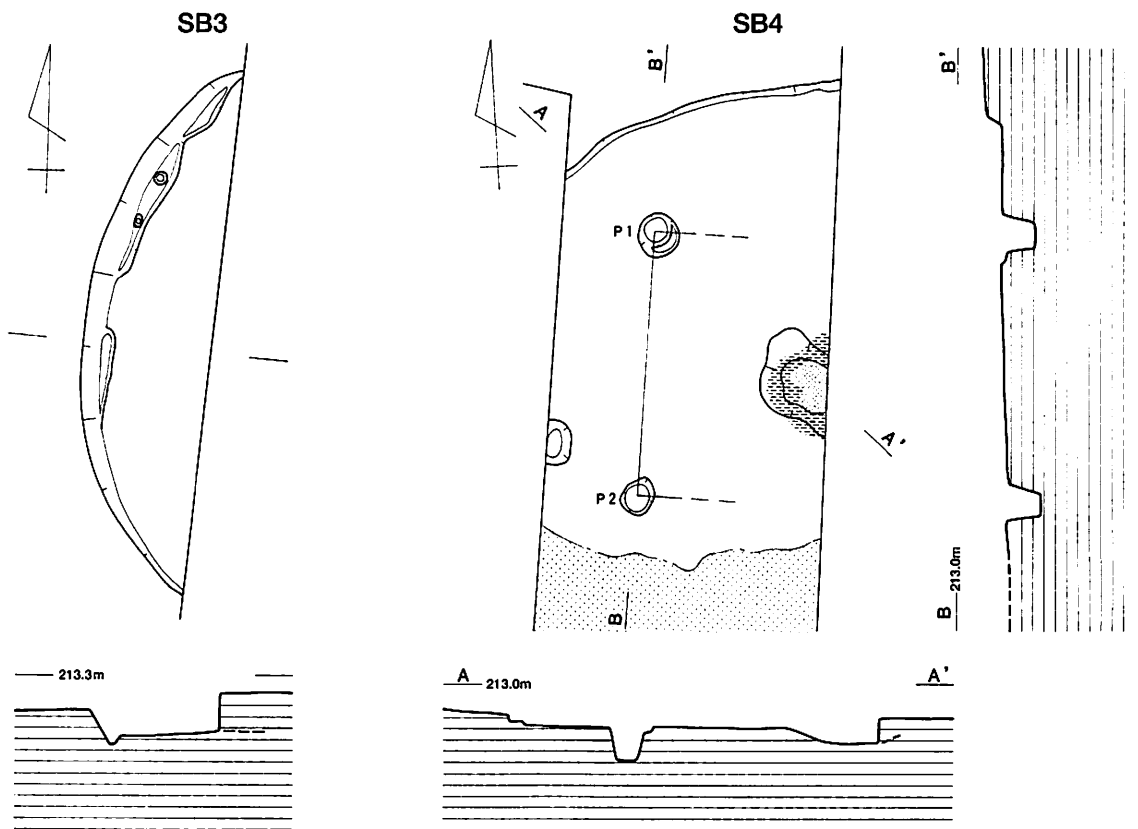
**SB4** (第6図, 図版3a)

A-1区の中央部に位置する。北西2.4mにSB2がある。南側は後世の削平を受けており不明であるが, 本来はSB5と重複関係にあったと推定される。

東・西側は調査区外のため形状は不明であるが, 円形と推定される。規模は検出面で東西2.2m, 南北3.1m, 壁高は北壁で5~11cmである。

床面は径6.0mと推定され, ほぼ平坦である。壁溝は検出されなかった。

柱穴は3基確認されたが, 支柱穴が2基(P1・2)で4本柱構造と考えられる。柱穴の規模は, P1は径0.4m, 深さ0.3m, P2は径0.3m, 深さ0.3mである。P1~P2の柱間距離は2.1mである。



第6図 SB3・4実測図(1:60)

調査区東壁際で東西方向0.7 m，南北方向0.8 m，深さ0.1 mの土坑を検出した。炭化物と焼土が多量に出土していることから炉跡と考えられる。

埋土上層から甕の口縁部（10）が出土した。

### 出土遺物（第12図）

#### 土師器

甕（10） 口縁部の破片で，頸部から大きく外反し，端部はほぼ水平になり丸く終わる。調整は内外とも丁寧なヨコナデで，胎土は1 mm程度の砂粒を多く含み焼成は良好である。

### SB5（第7図，図版3 b）

A-1区の中央部に位置する。西2.0 mにSX1がある。南側は水田造成時に削平されており不明であるが，本来はSB4と重複関係にあったと推定される。

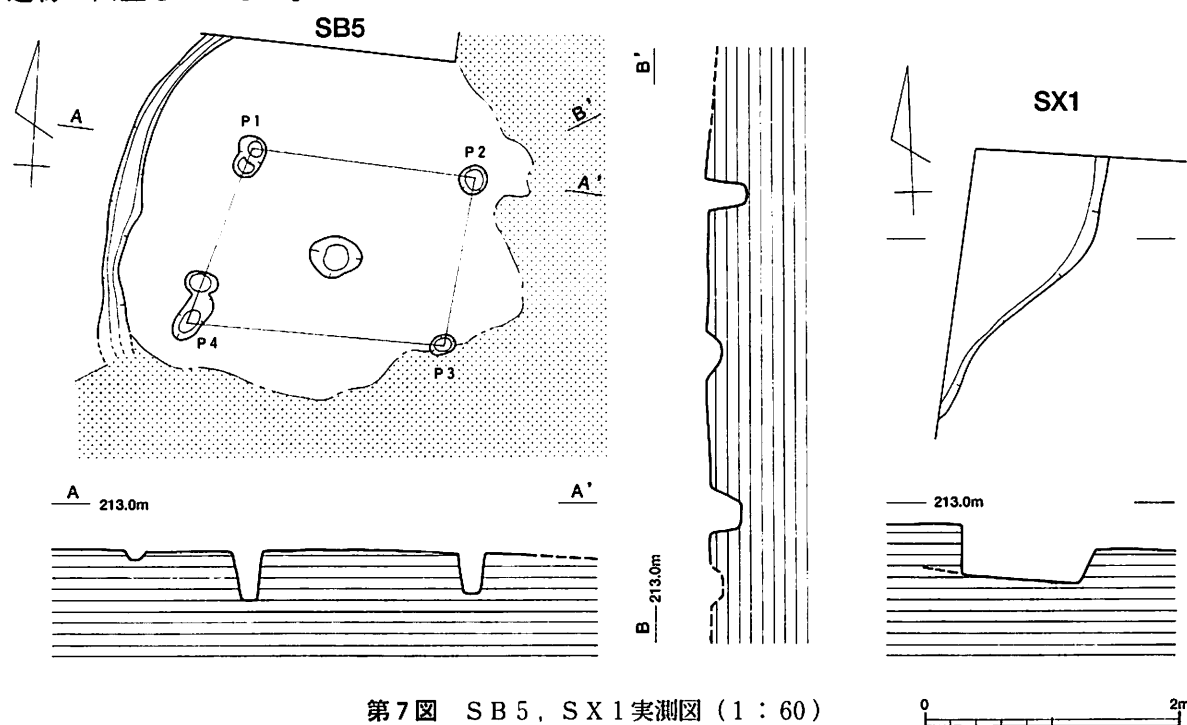
北側は調査区外のため形状は不明であるが，検出部分の形から円形と推定される。規模は検出部分で東西方向3.4 m，南北方向3.6 mである。床面は径5.6 mと推定され，ほぼ平坦である。

北西側で幅0.1～0.2 m，深さ2～8 cmの壁溝を検出した。

柱穴は7基確認されたが，主柱穴が4基（P1～4）で4本柱構造と考えられる。柱穴の規模は，P1は径0.2 m，深さ0.4 m，P2は径0.2 m，深さ0.3 m，P3は径0.2 m，深さ0.2 m，P4は径0.2 m×0.4 m，深さ0.2 mである。柱間距離は，P1～P2が1.7 m，P2～P3が1.4 m，P3～P4が2.0 m，P4～P1が1.5 mである。

床面中央部に東西方向0.5 m，南北方向0.4 m，深さ0.1 mの炉跡と考えられる土坑を検出した。

遺物は出土していない。



第7図 SB5，SX1実測図（1：60）

### S X 1 (第7図, 図版3 b)

A-1区の中央部の西側調査区境に位置する。東3.3 mにS B 5がある。南東部のみ確認できた。その他の部分は調査区外であるため形状は不明である。検出部分の規模は東西1.0 m, 南北2.1 m, 深さ0.3 mである。

床面はほぼ平坦であり, 埋土はS B 1~5と同様の暗褐色粘質土であることから住居跡の可能性も考えられたが, 確認できた南東部の平面形が不定形であり, 柱穴や壁溝が検出できなかったことから, ここでは性格不明の遺構とした。

## 2 A-2区 (第8図, 図版4 a)

A-2区の遺構面の標高は212.5~213.5 mで, 土層の堆積状況から旧地形も現在の地形と同様に南北方向に傾斜していたと考えられる。検出した遺構は土坑5基と小土坑数基である。遺物は, 弥生土器の器台の破片と石器, 鉄器などが出土している。

### S K 1 (第9図, 図版4 b・c)

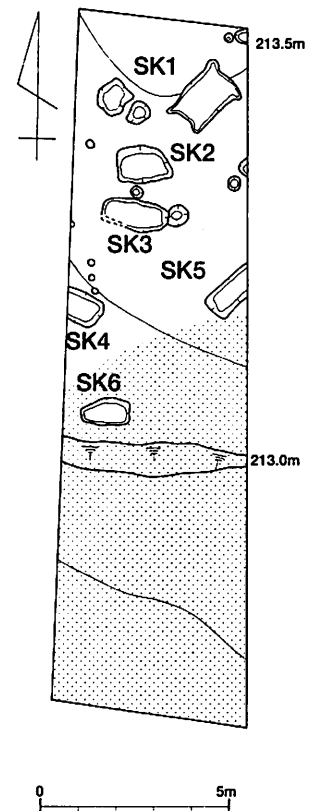
A-2区の北側に位置する土坑である。南西1.2 mにS K 2がある。平面形は長方形であるが四隅には掘り込みがみられる。この掘り込み部分は底面まで深く掘り込んでおらず, ゆるい傾斜をなしている。規模は北東~南西方向が1.6 m, 北西~南東方向が1.1 m, 深さ0.2 mである。底面はほぼ平坦であるが, 南西側がやや低い。形態的には, 組合式木棺を収めた可能性があると思われる。

埋土は単一層で, 床面から石鏃(11・12・14~16)と楔形石器(13), 石槍の破片(17)が出土している。

### 出土遺物 (第12図, 図版23)

#### 石器

石鏃(11・12・14~16) これらはいずれも打製である。12のみが有茎式で, それ以外は平基式である。基部に浅い抉りがある。大きさは14・15が小さく(長さ2 cm未満), 11は比較的大きい(3 cm前後)。側縁の形態でみると11・12・15は外膨み, 14は直線的, 16は内膨みである。いずれも背面・腹面とも細かな二次加工は縁辺に施されるにとどまり, 中心部は丁寧に加工されていない。そのため, 中心部は平坦であり腹面に素材時の剝離面を残している。なお, 14・15は完形であるが, ほかは欠損している。欠損した石鏃の折れ面をみると, 11は新しく, 12・16は古く, 使用時もしくは廃棄時に折れたものと考えられる。石材はすべて珪質凝灰岩である。



第8図 A-2区  
遺構配置図(1:200)

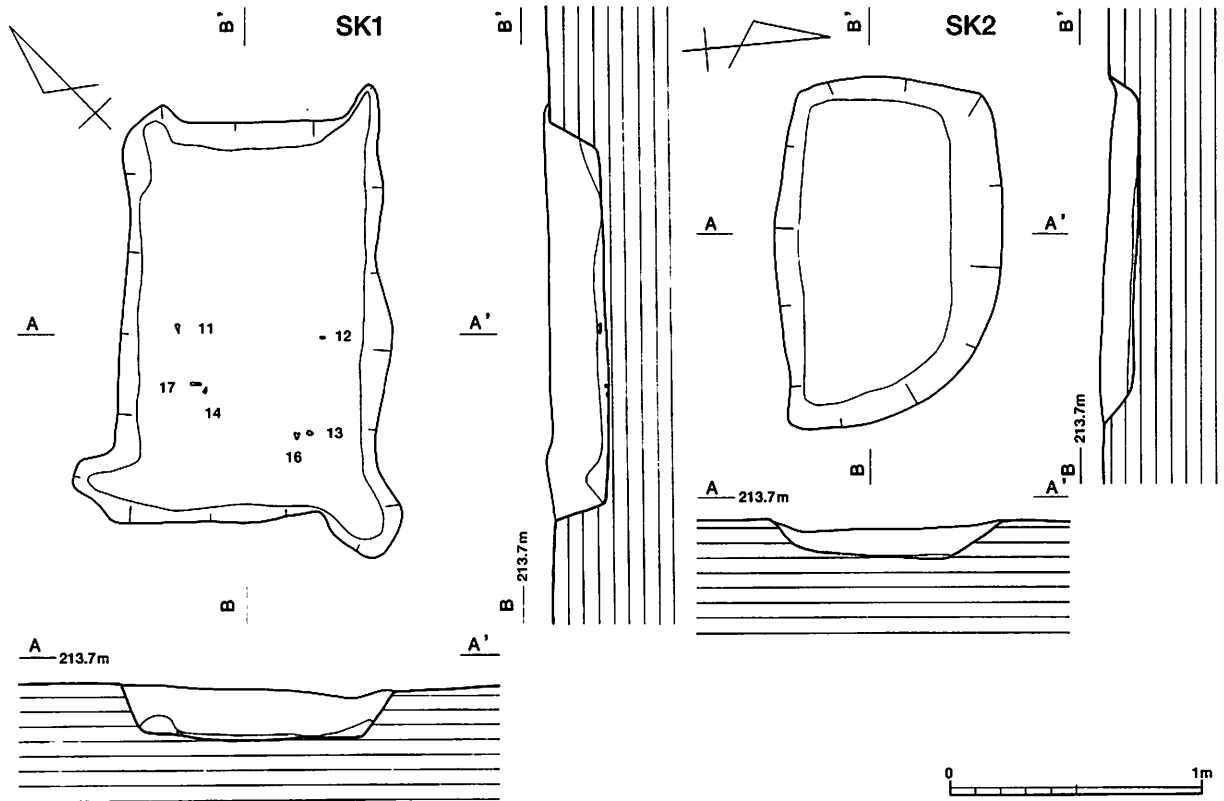
石槍（17） 打製石槍の基部と考えられ、上半部を欠損している。現存長は3.6 cmである。薄い横長の剥片を素材として、縦方向に用いていると推定される。背面・腹面とも中心部に平坦面を残しており、細かな二次加工は縁辺に施されるにとどまる。石材は珪質凝灰岩である。

**SK 2**（第9図，図版5 a・b）

A-2区の北側に位置する土坑である。北東1.2 mにSK 1がある。平面形は北東隅の一部にゆるやかな曲線を描く長方形である。規模は東西方向1.4 m，南北方向0.9 m，深さ0.2 mである。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

**SK 3**（第10図，図版5 a・b）

A-2区の北側に位置する土坑である。北1.0 mにSK 2がある。西側が攪乱を受けているが、平面形は長方形と考えられる。規模は北西～南東方向1.7 m，南西～北東方向0.8 m，深さ0.4 mである。礫層を掘り込んでいるため、壁及び底面は礫で凹凸がはげしい。東側で径約0.6 m，深さ0.4 mの小土坑と重複しているが、平面形の切り合いからみて小土坑がSK 3より古い。



第9図 SK 1・2実測図（1：30）

SK 4 (第 10 図, 図版 5 b)

A-2 区のほぼ中央に位置する土坑で, 北東約 2.0 m に SK 3 が, 南東 2.0 m に SK 6 がある。

西側が調査区外になるため平面形は不明であるが, 東側の形状から長方形と考えられる。規模は検出部分で北西~南東方向 1.3 m, 南西~北東方向 0.8 m, 深さ 0.2 m である。

底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

SK 5 (第 11 図, 図版 5 b)

A-2 区のほぼ中央に位置する土坑である。北西約 2.1 m に SK 3 がある。

北東側が調査区外になるため平面形は不明であるが, 南西側の形状から長方形と考えられる。規模は検出部分で北西~南東方向 1.7 m, 南西~北東方向 0.8 m, 深さ 0.3 m である。

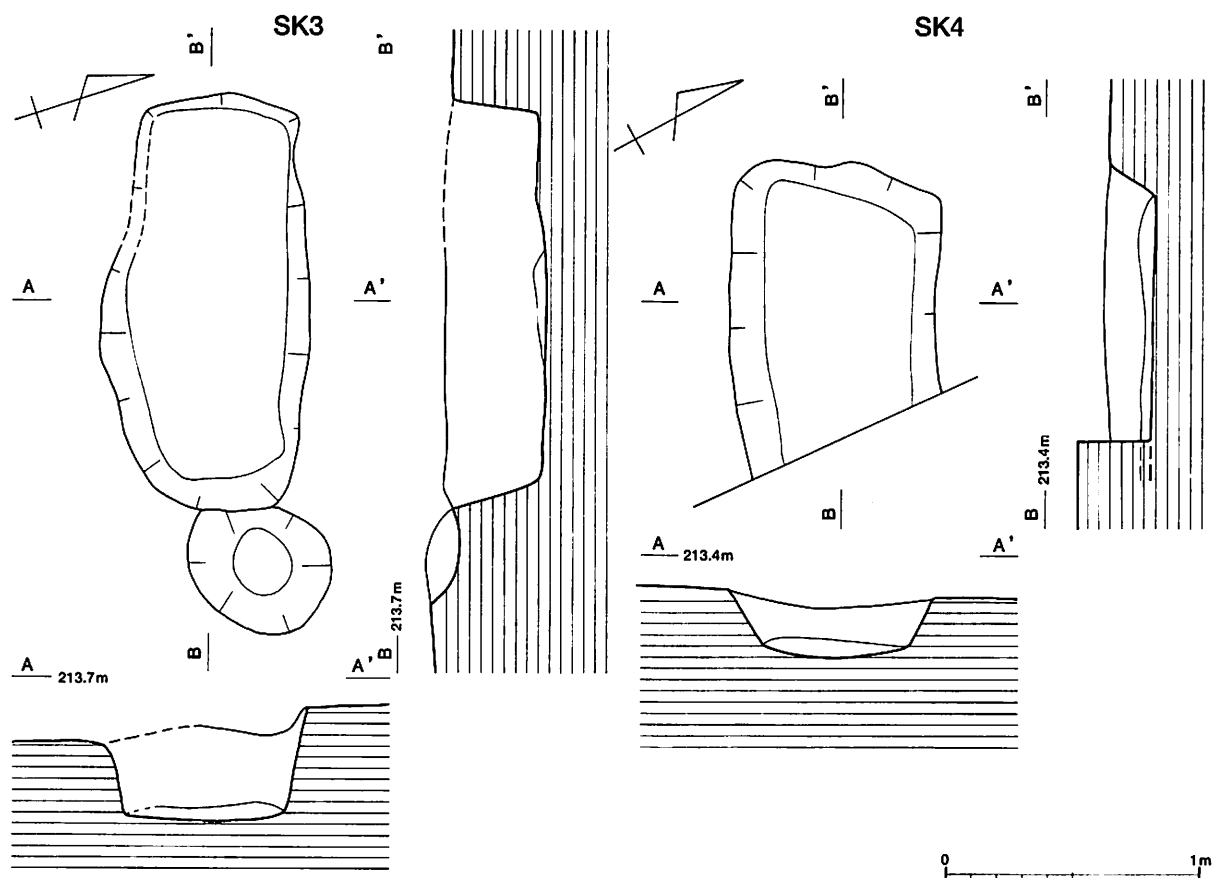
底面はほぼ平坦であるが, 西側がやや低い。遺物は出土していない。

SK 6 (第 11 図)

A-2 区の中央部からやや南側に位置する土坑である。北西約 2 m に SK 4 がある。

平面形は西側がやや狭い長方形で, 規模は東西方向 1.3 m, 南北方向 0.7 m, 深さ 0.3 m である。

底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。



第 10 図 SK 3・4 実測図 (1:30)

### 3 A-3区 (図版5c)

A-3区の遺構面の標高は211.5～212.5mで、土層の堆積状況から旧地形も現在の地形と同様に南北方向に傾斜していたと考えられる。

遺構は存在しなかったが、遺物は土師器・須恵器の破片が出土している。

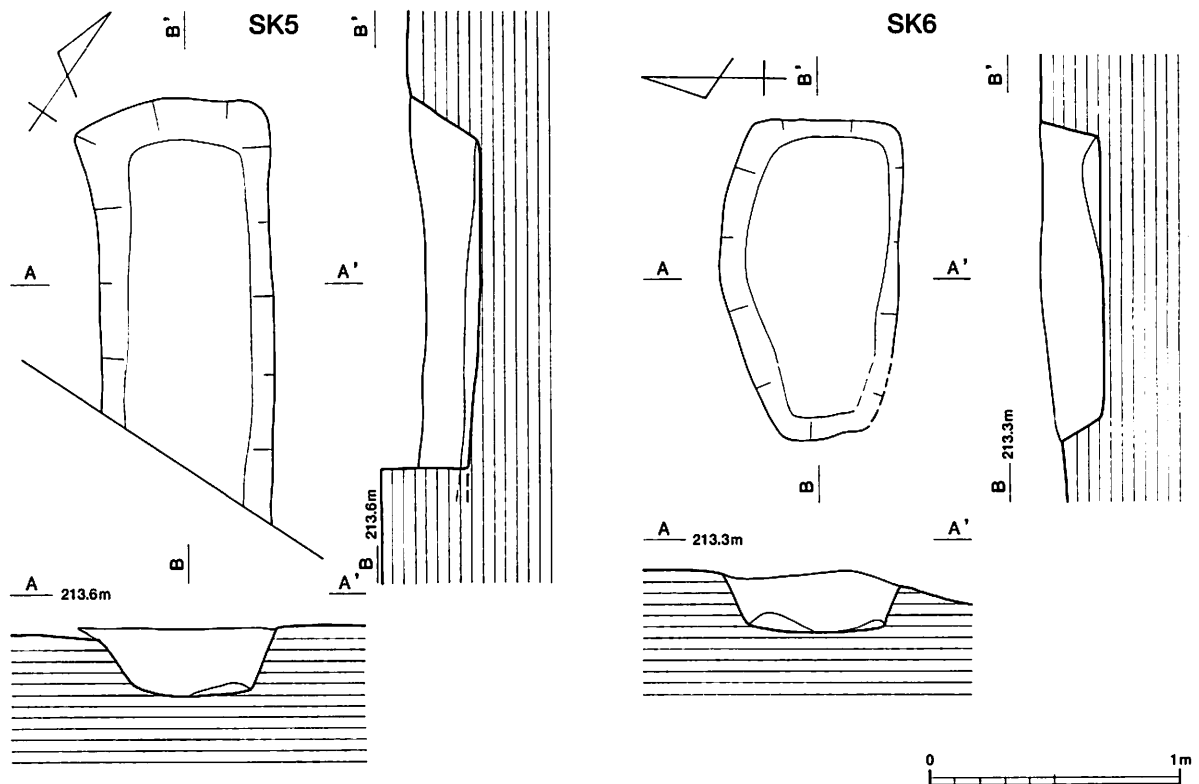
#### A区出土遺物 (第13図, 図版22・23)

##### 弥生土器

壺(20) 約3分の1の破片である。復元口径22.7cmである。口縁部は肩部から頸部にかけて緩やかに内傾し、直立気味に立ち上がりほぼ直角に外反した後、やや内側に立ち上がる。端部はやや拡張させて平らに終わる。口縁部外面に10条の凹線があり、その上から7条の条痕を縦方向に施している部分もある。頸部中央の外面には断面が三角形の突帯を貼り付けており、上半にハケ目、下半には櫛歯状工具による波状文を2条施している。調整は口縁内外ともヨコナデである。胎土は1mm程度の砂粒を多く含み焼成は良好である。

甕(21) 復元口径が11.6cmの小型の甕で、口縁部～頸部の5分の1以下の破片である。頸部が「く」字状に外反し、端部は上下に肥厚し、丸く終わっている。口縁部外面に3条の凹線が、頸部外面にはヘラ状工具による刺突文がある。調整は口縁内外ともヨコナデ、肩部の胴部内面は横方向のヘラ削りである。胎土は0.5mm程度の砂粒を含み焼成は良好である。

高杯(19) 脚柱上部の破片である。外面の調整はナデの後、縦方向のヘラ磨き、内面は不



第11図 SK5・6実測図(1:30)

定方向のヘラ削りである。脚部と胴部との接合は挿入法によるものと考えられる。胎土は1～3mmの砂粒を多く含み焼成は良好である。

#### 土師器

甌(22) 上半と下半に接点がなく図上復元している。復元口径21.4cm、復元胴部最大径23.1cm、復元器高31.5cmである。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は丸く終わる。胴部は長胴気味で、下半はやや細くなる。内面は肩部周辺が横方向、下部は斜め方向のヘラ削り、基部周辺で横方向のヘラ削りが残っている。調整は口縁内外ともヨコナデで、外面は縦方向のハケ目、胎土は1～3mmの砂粒を含み焼成は良好である。

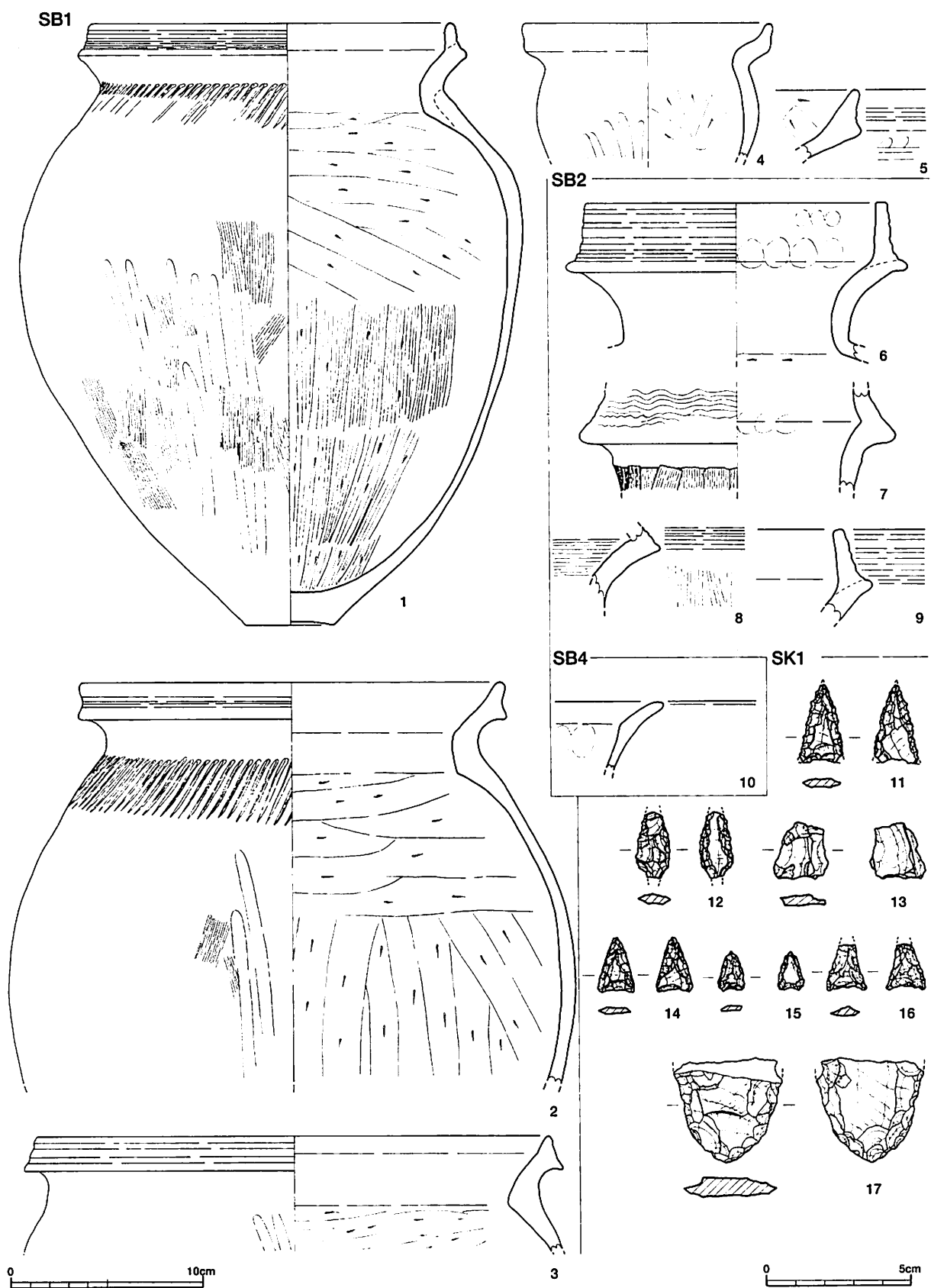
甕(27～29) 27は復元口径が14.8cm、復元胴部最大径が13.3cmで上位にあり、鉢にちかい器形である。口縁部は短く外反して立ち上がり、端部は丸く終わる。調整は口縁内外ともヨコナデ、胴部外面の上部は横方向、中部は縦方向のナデ、内面の上部は横方向、中部は斜め方向のヘラ削りである。胎土は0.5～1mmの砂粒を含み焼成は良好である。28は口径19.5cm、胴部最大径22.6cm、器高26.6cmである。口縁部がゆるやかな「く」字状に屈曲するもので、口縁端部は丸く終わる。胴部は長胴気味の球形で最大径は下半にある。底部は丸底であるが、部分的に平坦面が残る。調整は口縁部の内外面ともにヨコナデ、胴部外面はハケ目が残っている。内面の上部は横方向、中～下部は斜め方向のヘラ削りである。胎土は0.5～1mmの砂粒を含み、焼成は良好である。底部から胴部下半にかけての外面に煤の付着が認められた。29はいわゆる山陰系の甕である。復元口径は18.9cm、復元頸径は12.6cmである。口縁部は薄く引き出し、端部は尖り気味に丸く終わる。口縁の接合部は突出しておらず丸く納めている。調整は口縁内外ともヨコナデ、胴部外面は横方向のハケ目、内面の上部は横方向のヘラ削りである。胎土は1～3mmの砂粒を多く含み焼成は良好である。色調は淡黄褐色で在地産と思われる。

#### 土師質土器

皿(23～26) 23・24は口縁部・体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は薄く丸く終わる。底部は回転ヘラ切りで、器厚は薄くなっている。23の口径は10.4cm、器高2.0cm、底径4.8cmで、内面に煤が付着していることから灯明皿と考えられる。24の口径は10.4cm、器高1.9cm、底径6.8cmである。煤は付着していないが23とともに灯明皿と考えられる。25・26は高台を貼り付けたもので、25の底径は7.6cm、26は6.9cmである。切り離しは回転糸切りと思われる。接合部分の内外面には丁寧なナデが施されている。

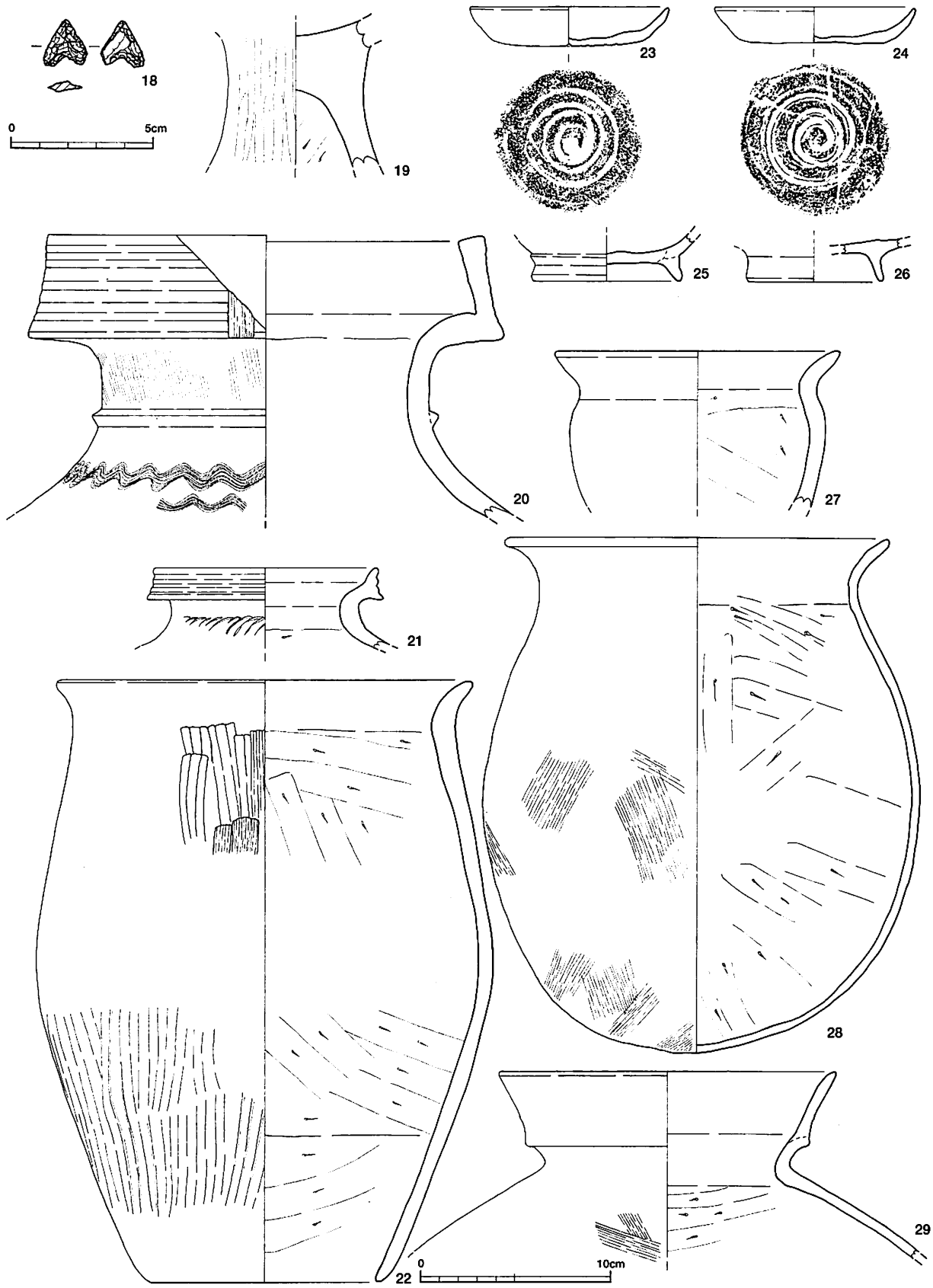
#### 石器

石鏃(18) 無莖式であり、基部に抉りがある。長さは1.5cmで、側縁の形態は外膨みである。背面・腹面とも細かな二次加工は縁辺に施されるにとどまり、中心部には至らない。そのため、中心部は平坦であり腹面に素材時の剝離面を残している。



第12图 A区出土遗物实测图(土器1:3,石器1:2)





第13图 A区出土遗物实测图(土器1:3,石器1:2)

#### 4 B-1区 (第14図, 図版6a)

B区は遺跡の中央部南側に位置する調査区である。南北方向に3地点の調査区があり、北側からB-1区・B-2区・B-3区とした。B-1区の遺構面の標高は215.0～217.5mで、土層の堆積状況から旧地形も現在の地形と同様に南北方向に傾斜していたと考えられる。

遺構面が2面あり遺構は各面3基の土坑を検出した。遺物は、小型の磨製蛤刃石斧、須恵器・土師質土器・陶磁器の破片などが出土している。

#### SK7 (第15図, 図版6b)

SK7～9は、B-1区第1面の南側に位置する土坑である。南北方向にほぼ等間隔に並んで存在しており、南1.3mにSK8、南3.3mにSK9がある。

平面形はほぼ円形で、規模は径約2.0m、深さ0.5mである。底面はゆるやかに窪んでいる。

遺物は、土師質土器皿の小片が出土している。

#### SK8 (第15図, 図版6b)

平面形は円形で、規模はSK7・9よりも小さく径約1.1m、深さ0.3mである。底面はほぼ平坦で、北側がやや高い。

遺物は出土していない。

#### SK9 (第15図, 図版6b)

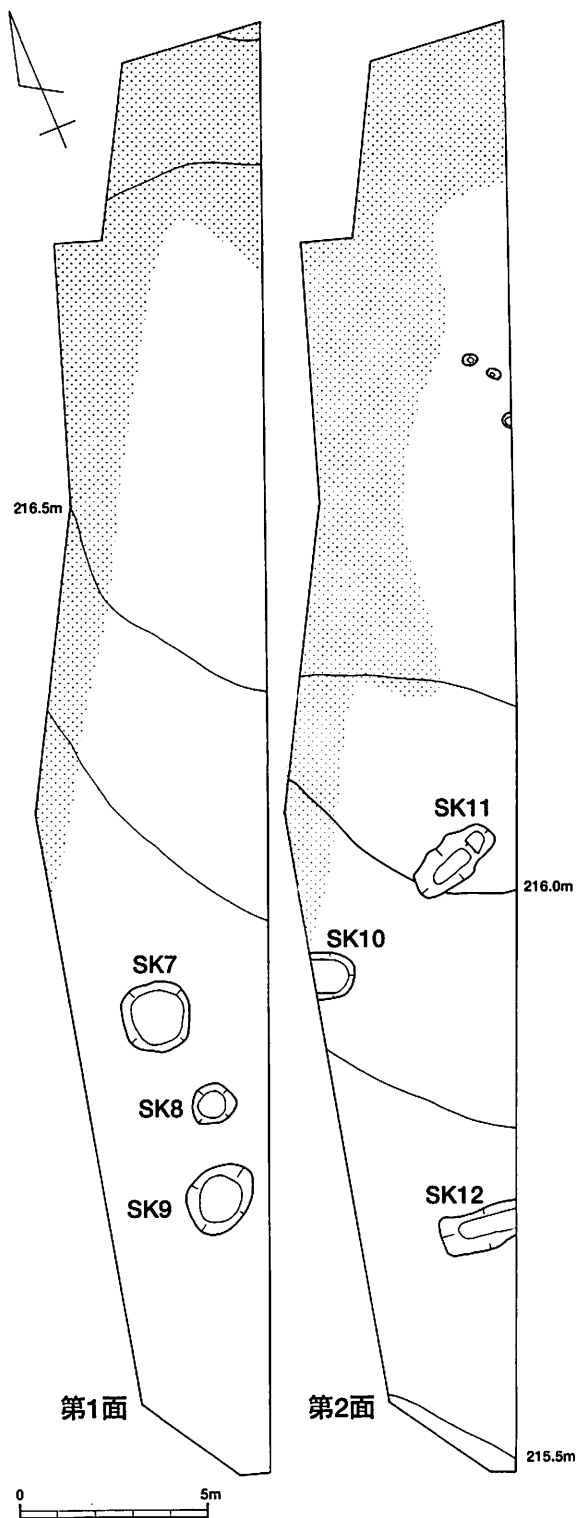
平面形は東西方向が長い楕円形で、規模は東西方向1.9m、南北方向1.7m、深さ0.5mである。底面はほぼ平坦である。

遺物は出土していない。

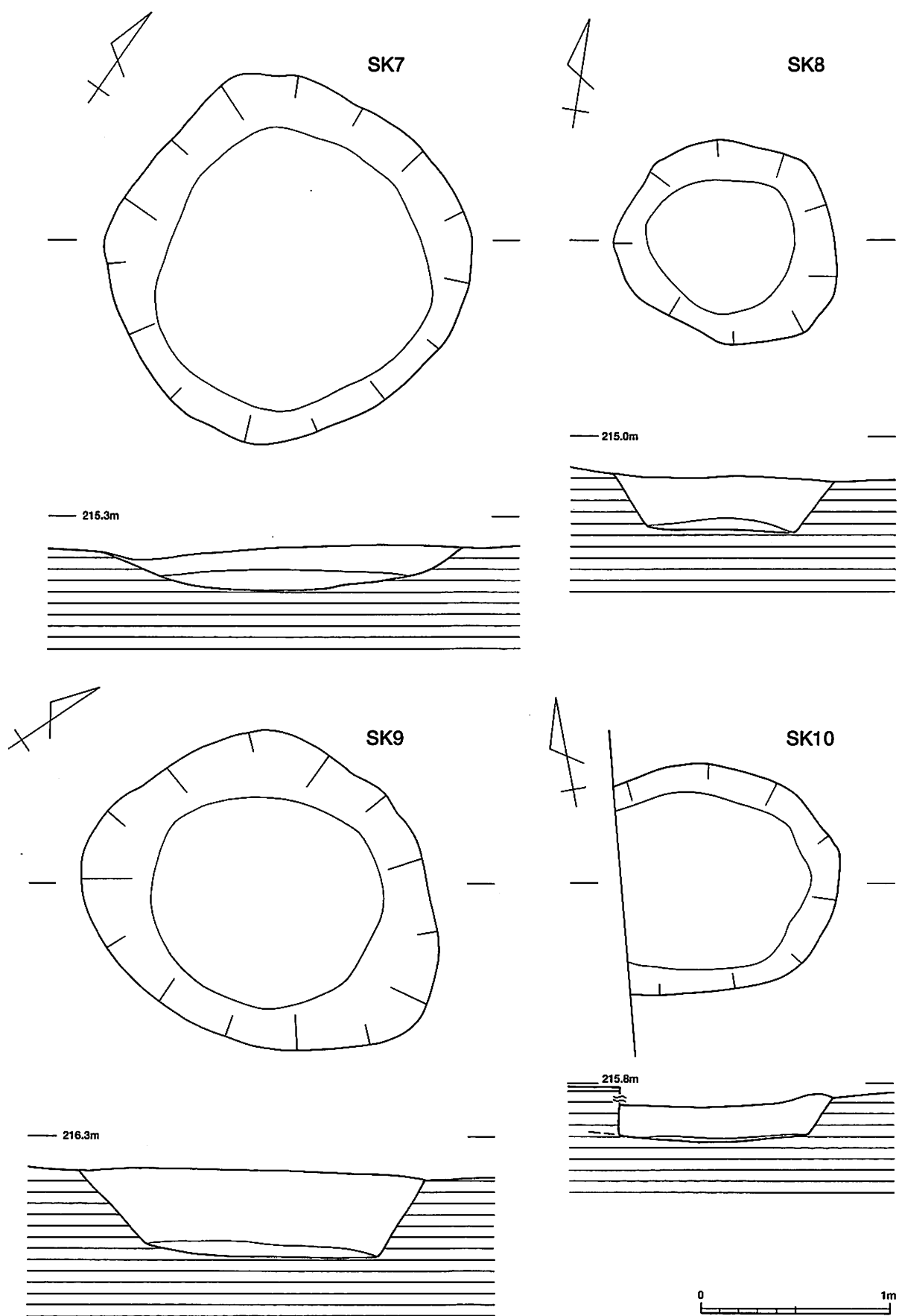
#### SK10 (第15図, 図版6c)

B-1区第2面の南側に位置する土坑である。北東2.8mにSK11、南東6.6mにSK12がある。

西側が調査区外になるため平面形は不明であるが、東側の形状から東西方向に長い楕円形と考えられる。規模は検出部分で東西方向1.2m、南北方向1.2m、深さ0.2mである。底面はほぼ平坦で、遺物は出土



第14図 B-1区遺構配置図 (1:200)



第15图 SK7~10实测图(1:30)

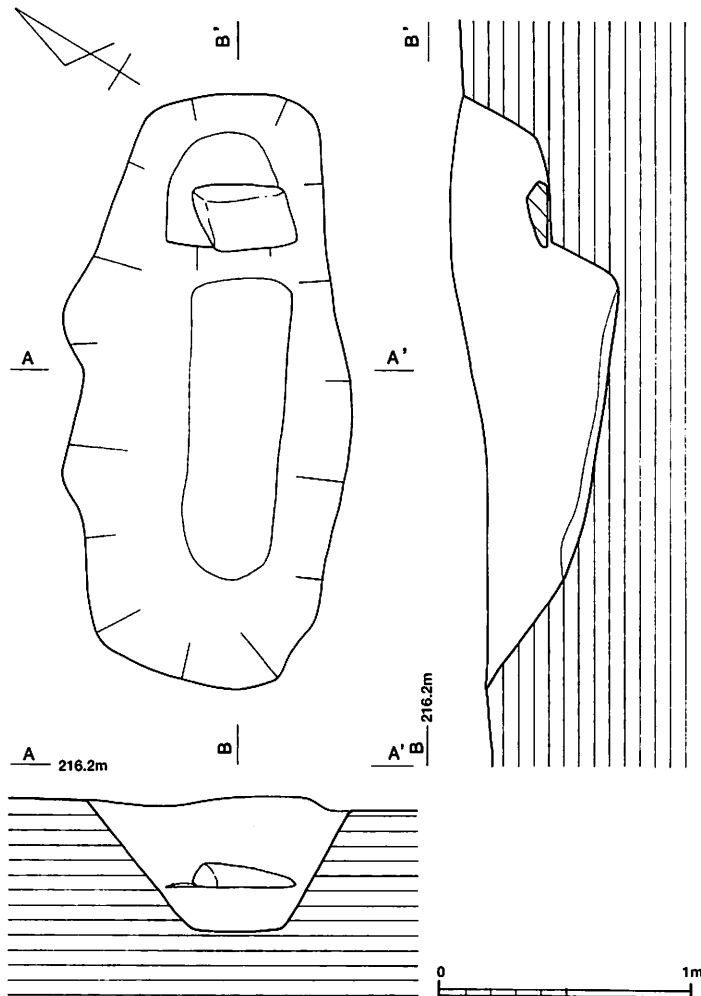
していない。

### SK 11 (第 16 図, 図版 7 a)

B-1 区の第 2 面の中央付近に位置する土坑である。南西約 2.8 m に SK 10, 南約 8.6 m に SK 12 がある。平面形は不整楕円形で, 規模は北東~南西方向 2.4 m, 北西~南東方向 1.1 m, 深さ 0.7 m である。底面は長方形で, 南西側の壁は約 30 度の角度で立ち上がっている。また北東側は二段に掘り込まれており, 北東側の上端から約 0.3 m 下に 0.5 m × 0.5 m のほぼ水平な平坦面がある。その平坦面から 40 cm × 30 cm × 10 cm の底面が平坦な石が出土しているが, この石が何を意味するのかわからない。その他の遺物は出土していない。

### SK 12 (第 17 図, 図版 7 b)

B-1 区の第 2 面の南端に位置する土坑で, 北西 6.6 m に SK 10, 北 8.6 m に SK 11 がある。東側が調査区外になるため平面形は不明であるが, 西側の形状から長方形と考えられる。規模は東西方向 2.0 m, 南北方向 1.1 m, 深さは 0.4 m である。底面は長方形で, ほぼ平坦である。遺物は出土していない。



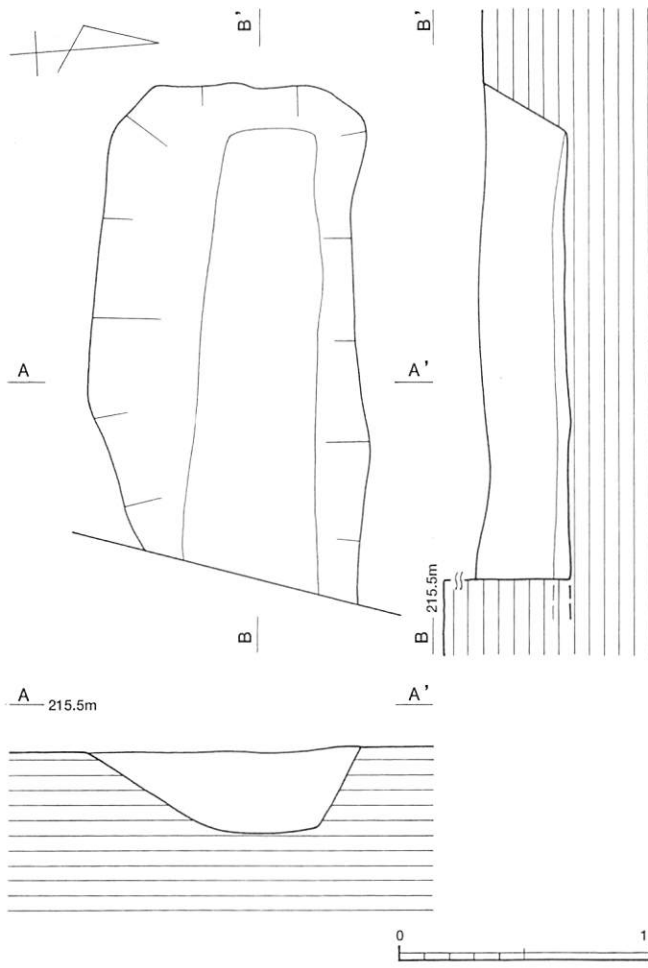
### 5 B-2 区 (第 18 図, 図版 7 c)

B-2 区の遺構面の標高は 214.5 ~ 215.5 m で, 土層の堆積状況から旧地形も現在の地形と同様に南北方向に緩やかに傾斜していたと考えられる。

検出した遺構は調査区外へ延びる掘立柱建物跡 1 棟, 土坑 10 基, 性格不明の遺構 3 基と小土坑群である。

遺物は, SK 13 から瓦質土器の播鉢, SK 22 から青銅製の煙管のほか, 須恵器・土師質土器・陶磁器の破片や石臼, 鉄釘などが出土している。

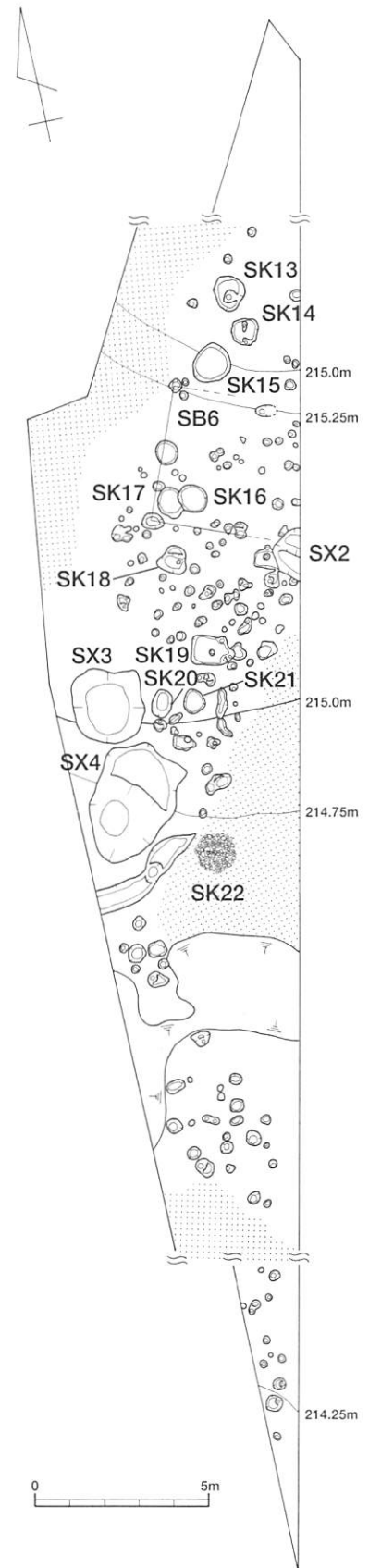
第 16 図 SK 11 実測図 (1 : 30)



第17図 SK12実測図(1:30)



B-2区(南から)



第18図  
B-2区遺構配置図(1:200)

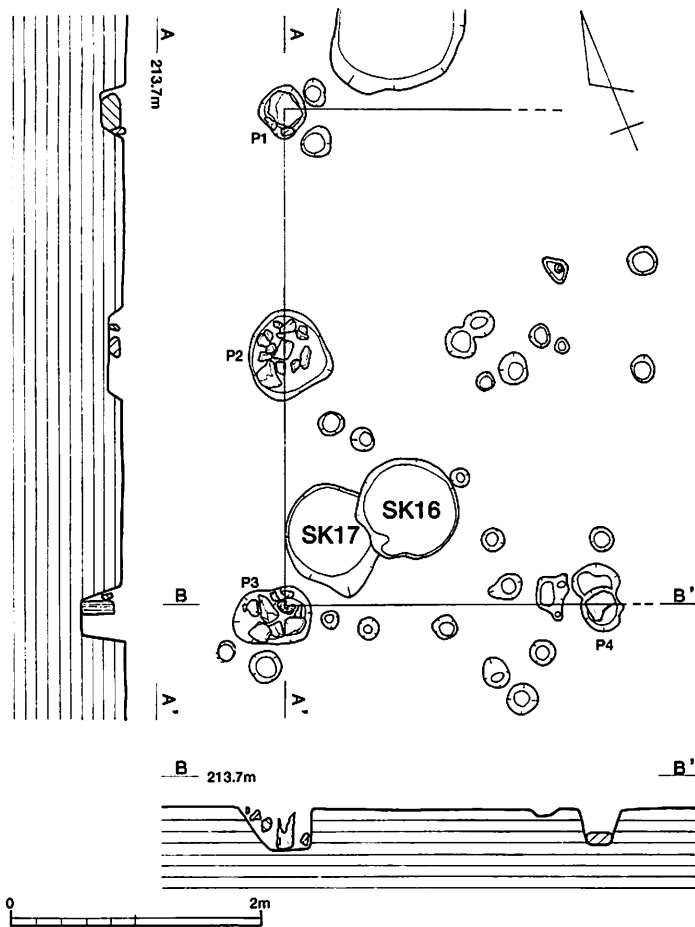
**SB 6** (第19図, 図版8 a・b)

B-2区の北半分に位置する掘立柱建物跡である。P3の北東側にSK16・17が、P1の北東側にSK15がある。

東側は削平を受けているため正確な規模は不明であるが、東側に延びる可能性があるので南北方向を梁行とした。検出部分での規模は桁行2.5m、梁行3.9mで、実際には桁行2間以上、梁行2間であったと考えられる。桁行方向はN67°Wである。柱間距離はP1～P2が2.0m、P2～P3が1.9m、P3～P4が2.5mである。柱穴の規模は、P1が径約0.3m、深さ0.2m、P2が径約0.7m、深さ0.2m、P3が0.7m×0.4m、深さ0.3m、P4が径約0.3m、深さ0.3mで、深さは斜面下側にあたるP3・4が深くなっている。

P1・P4には、それぞれ大きさが20～30cm、厚さ10～20cm程度の平たい面をもつ石が出土している。石は平坦面を上にした状態で、底面に接して置かれていることから、根石と考えられる。P2・P3からは10～20cmの小石が数個出土しており、他の柱穴と違い柱材を固定するための詰め石と考えられる。またP3からは径約10cm、長さ約30cmの柱材が出土した。

遺物は出土していない。



第19図 SB 6実測図(1:60)

**SK 13** (第20図, 図版8 c)

B-2区の北半部に位置する土坑であり、南0.3mにSK14、南西1.0mにSK15がある。平面形は北側が幅広い不整な台形状で、規模は南北方向1.0m、東西方向0.9m、深さ0.3mである。掘方は二段に掘り込まれ、表面上端から約0.2m下に南東側が不明瞭であるがほぼ全周を巡る平坦面があり、そこから0.2m下に平坦な底面がある。瓦質土器の播鉢(32)の破片が1個体出土しているが、床面直上から出土しておらず、下段が埋まった時点で他の石材と同時に廃棄された可能性が考えられる。

**出土遺物** (第27図, 図版23)

瓦質土器

播鉢(32) 体部は器厚がほぼ一定で直線的に外方に開き、口縁部に至

ってやや厚くなり端部を内側につまみ出して平らに終わる。内面には横方向にカキ目を施した後、5条を1単位とする条痕（摺目）を放射状に16か所施している。調整は口縁内外ともヨコナデ、体部外面もヨコナデである。体部外面には粘土紐巻上げ時の丁寧な指頭による成形痕が残る。胎土は1～3mmの砂粒を少し含み焼成は良好である

### SK 14（第20図，図版8c）

B-2区の北半部に位置する土坑である。北0.3mにSK 13，南西0.3mにSK 15がある。

平面形は方形で，規模は北東～南西方向0.8m，北西～南東方向0.7m，深さ0.1mである。底面はほぼ平坦であるが，小穴が4基，及び溝状の落ち込みが北側から中央付近までであるが性格は不明である。南側に土坑と重複関係にある径0.2m，深さ0.2mの穴があるが，埋土の堆積状態から土坑より新しいと考えられる。遺物は出土していない。

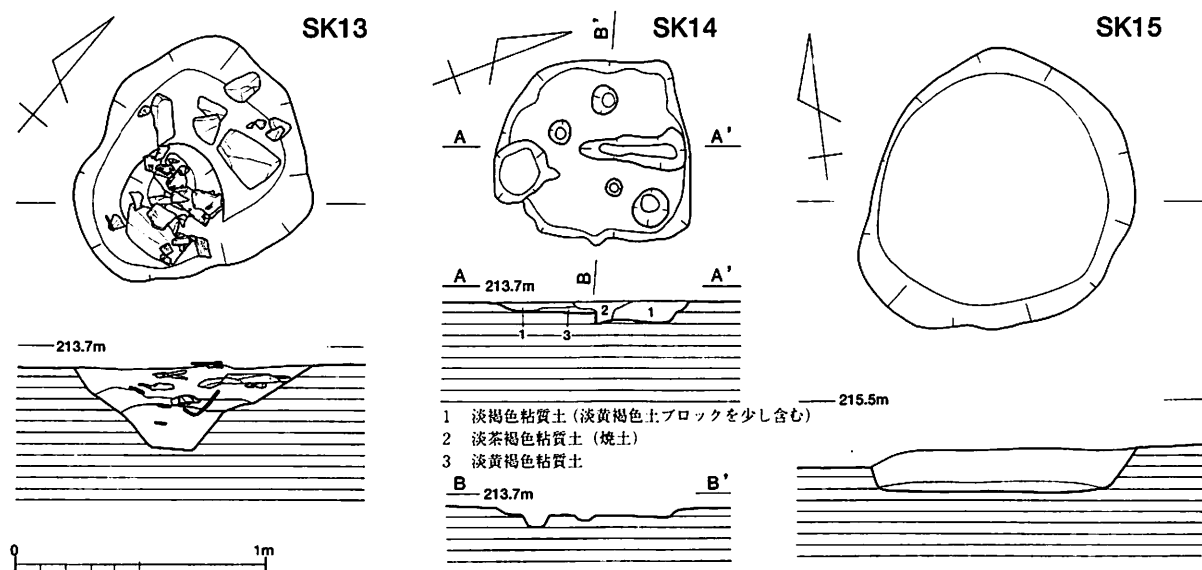
### SK 15（第20図，図版8c）

B-2区の北半部に位置する土坑である。北東1.0mにSK 13，同じく0.3m先にSK 14がある。平面形は円形で，径約1.1m，深さ約0.2mである。底面は中央に向かって窪んでいるが，ほぼ平坦である。遺物は出土していない。

### SK 16（第21図，図版9a）

B-2区の中央部に位置する土坑である。南西1.8mにSK 18，南東2.2mにSX 2がある。

平面形は円形で，径約0.8m，深さ約0.1mである。底面はほぼ平坦である。SK 17とは重複関係にあり，土層が単一層で確認できなかったが，検出及び精査作業時の観察からSK 16がSK 17より新しいと思われる。遺物は，埋土から弥生土器の小片が出土した。



第20図 SK 13～15実測図（1：30）

**S K 17** (第 21 図, 図版 9 a)

B-2 区の中央部に位置する土坑である。西 0.8 m に S K 18, 南東 2.8 m に S X 2 がある。S K 16 とは重複関係にあり, S K 16 が 17 より新しい。平面形は不整形で, 径約 0.8 m, 深さ約 0.1 m で, S K 16 より若干深い部分がある。底面はほぼ平坦である。

遺物は埋土中から弥生土器の小片が出土した。

**S K 18** (第 21 図, 図版 9 b)

B-2 区の中央部に位置する土坑である。東 0.8 m に S K 17, 南西 3.2 m に S X 3 がある。

平面形は南西側が広い台形状の不整形で, 北東~南西方向 0.8 m, 北西~南東方向 0.6 m, 深さ 0.2 m である。二段に掘り込まれ, 北東側の上端から 0.1 m 下に 0.5 m × 0.1 m の平坦面があり, その 0.1 m 下に底面がある。底面は 0.5 m × 0.3 m の長方形で, ほぼ平坦である。床面の東側隅に径約 0.1 m, 深さ 0.1 m の柱穴があるが土坑より新しい。

遺物は出土していない。

**S K 19** (第 21 図, 図版 9 c)

B-2 区の中央部に位置する土坑である。北 3.2 m に S K 18, 南西 1.5 m に S K 20, 北東 2.4 m に S X 2 がある。

東側は後世に穴が掘られて崩されているため平面形は不明であるが, 西側の検出状況から長方形と考えられる。規模は北西~南東方向 1.2 m, 北東~南西方向 0.8 m, 深さ 0.2 m である。底面はほぼ平坦な長方形で, 中央に径約 0.2 m, 深さ 0.2 m, 北東部及び南東部に径約 0.2 m, 深さ約 0.3 m の小穴がある。検出状況から小穴は土坑より新しい。

遺物は出土していない。

**S K 20** (第 21 図, 図版 9 c)

B-2 区の中央部に位置する土坑である。北東 1.1 m に S K 19, 東 0.3 m に S K 21, 西 0.2 m に S X 3, 南西 0.8 m に S X 4 がある。

平面形は楕円形で, 北東~南西方向 0.8 m, 北西~南東方向 0.6 m, 深さ 0.2 m である。底面はゆるやかに窪んでいる。遺物は出土していない。

**S K 21** (第 21 図)

B-2 区の中央部に位置する土坑である。北東 0.8 m に S K 19, 西 0.3 m に S K 20, 南西 1.4 m に S X 4 がある。

平面形は北側がやや尖った円形で, 南北方向 0.7 m, 東西方向 0.6 m, 深さ 0.4 m である。底面はほぼ平坦であるが, 中央部がわずかに窪んでいる。

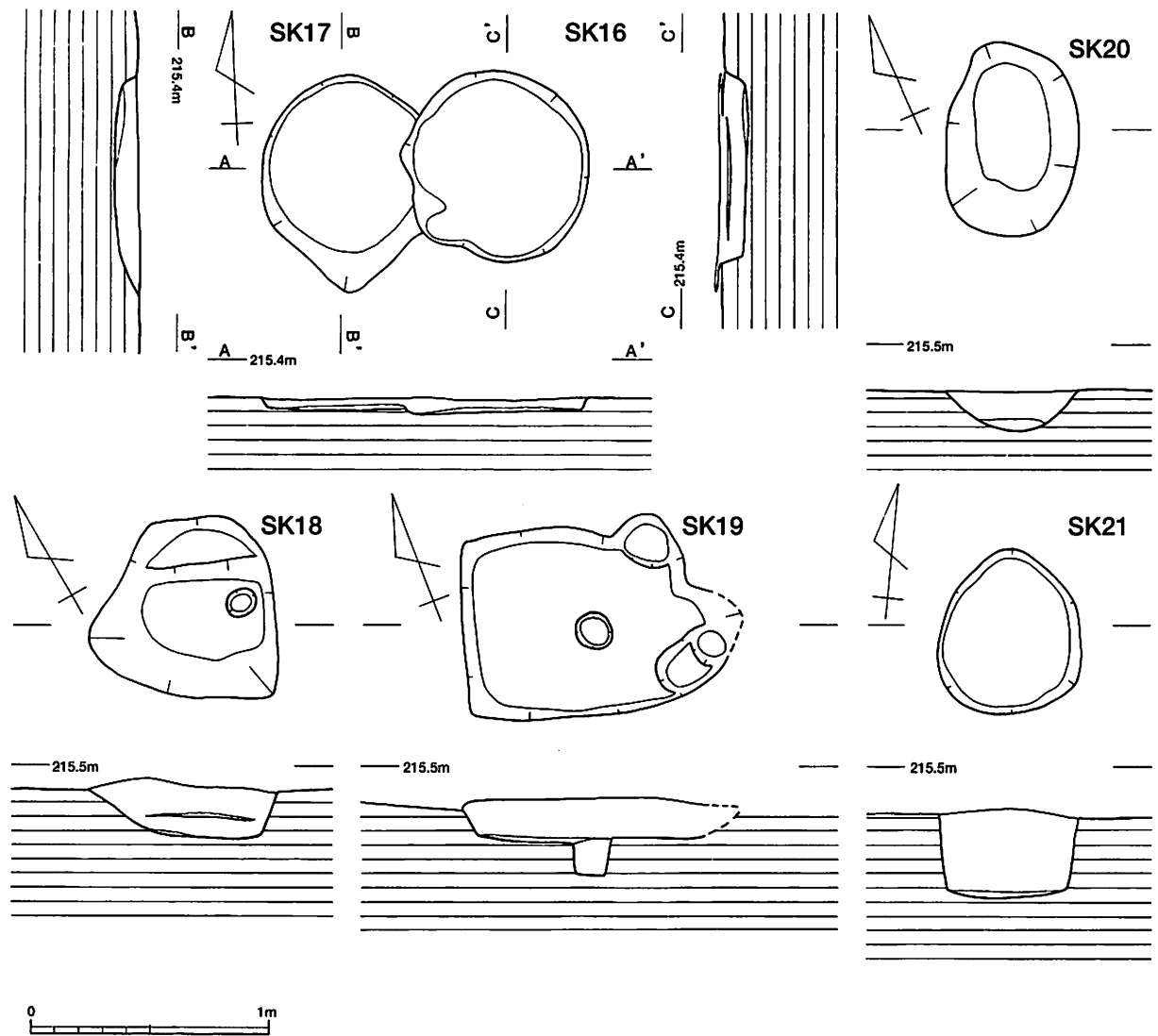
遺物は出土していない。



**SK 22** (第22図, 図版10 a~c)

B-2区のほぼ中央部に位置する土坑である。北西1.0mにSX4, 北3.6mにSK21がある。

平面形は円形で、検出面での径は約1.4m, 底面での径は1.1mである。深さは0.8mである。土坑の上端から内側に、厚さ3~5cmの橙褐色の漆喰が塗り込められていた。土坑底面からは、厚さ0.5cmの板材が出土した。板材は完存しておらず、復元すると円形で径が1.1m程度であったと思われる。板材は肉眼で確認できるものについては、ほとんど柃目であった。底部から10cm付近と20cm付近の壁に、タガの痕跡と考えられる幅5~7cmの横方向の溝が確認された。これらのことから底径が約1.1m, 高さが0.8m以上の桶が埋設され、土坑と桶の間は水分の流失を防ぐため漆喰を施したと考えられる。埋設方法については、側板は確認できなかったが、タガの痕跡と漆喰の状況から、桶よりやや大きい掘方を掘り込んだ後、桶を据えて、その後漆喰で桶と壁の隙間を固めたと考えられる。検出面から底板までは川原石で埋まっていた。石の大きさは長さが20~30cmの大きな石も含まれていたが、ほとんどは10~20cm程度のものではあった。こ



第21図 SK16~21実測図(1:30)

これらの石は、土坑の廃棄に伴って投入されたものと考えられる。

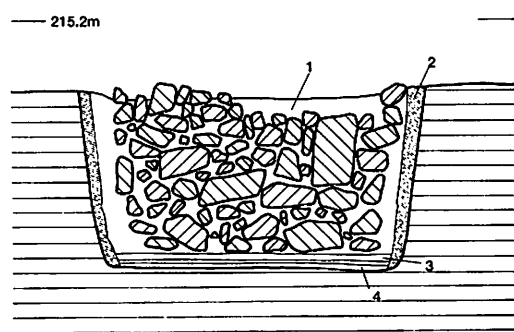
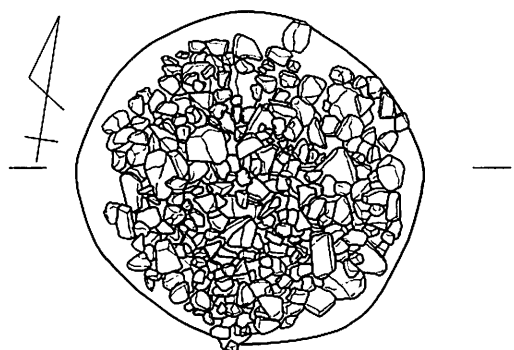
底板の上面では2～3cmの厚さで、沈殿物と思われる淡灰褐色砂質土が確認された。土坑の用途については、水分の漏れを防ぐ設備があることから水溜もしくは肥溜と考えられる。

遺物は桶の底板上北西部から煙管（33・34）と土師質土器皿（36）・陶磁器（35）の破片が出土している。

## 出土遺物（第27図，図版23）

### 土師質土器

皿（36） 口縁部～体部の4分の1の破片である。器高は2.9cmである。口縁部・体部は内湾気味に立ち上がり、端部はやや尖って終わる。胎土は1mm以下の砂粒を少し含み焼成は良好である。



- 1 淡褐色粘質土（炭化物を含む）
- 2 橙褐色粘質土（漆喰部分）
- 3 淡灰褐色砂質土
- 4 淡灰褐色粘質土

第22図 SK 22 実測図（1：30）

### 青銅製品

煙管（33・34） 33が雁首，34が吸口である。ほかに煙管が出土していないので両者は同一個体であったと思われる。これらは羅宇と呼ばれる木質の接合部が腐敗したのち欠落した状態で出土している。33は火皿の部分が欠落している。34は吸い口の端部を欠損しており，上下方向に潰れた状態で出土している。復元すると長さ8cm程度であったと思われる。雁首の脂返し部分がまっすぐに伸びていることから，新しい形態のものと思われ，江戸時代後期以降と考えられる。

### 陶器

甕（35） 甕と考えられる底部の破片である。内外面ともに鉄釉が施され，内面にはハケを用いて横方向に施されている。

鉢（37） 瀬戸・美濃系の破片である。体部・口縁部は内湾しながら立ち上がり，外面を強く押えることにより窪ませて口縁としている。端部は内傾させながらやや拡張して，平坦にしている。内面全体と口縁部外面には灰釉が施され，体部の無釉部分には煤が付着していることから，鍋として転用していたと思われる。

**S X 2** (第23図, 図版11 a)

B-2区の中央部に位置する。北東2.2 mにS K 16, 西2.4 mにS K 18, 南西2.4 mにS K 19がある。南東側が調査区外になるため平面形は不明であるが, 検出部分の形状から不整な楕円形と考えられる。規模は検出部分で北東~南西方向1.4 m, 北西~南東方向0.9 m, 深さ0.4 mである。二段に掘り込まれ, 西側の上端から0.2 m下に0.8 m×0.4 mの平坦面があり, その下約0.1 mに0.6 m×0.4 mの底面がある。土層の堆積状態から, 西側の上段は東側の下段より新しいと考えられる。

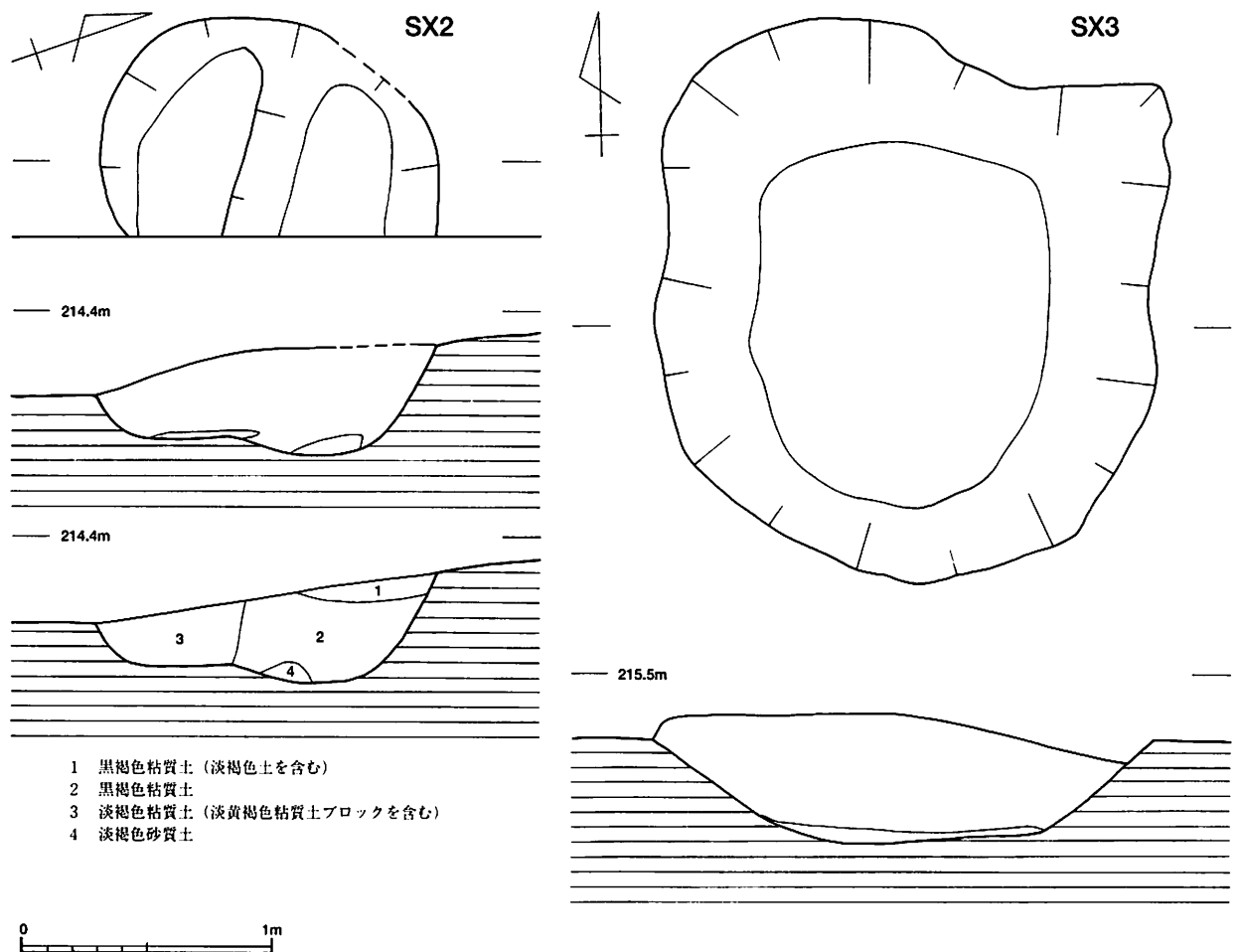
埋土から土師質土器の皿の破片が出土している。

**S X 3** (第23図, 図版11 b)

B-2区の中央部に位置する。北東3.2 mにS K 18, 東0.2 mにS K 20, 南0.1 mにS X 4がある。平面形は不整な円形で, 規模は南北方向2.2 m, 東西方向2.0 m, 深さ0.5 mである。

底面はゆるやかに窪んでいる。性格は不明であるが, 平面形が不整形で底面が平坦でないことなどから, 土取り跡の可能性も考えられる。

埋土から土師質土器・陶磁器の小片が出土した。



第23図 S X 2・3実測図 (1:30)

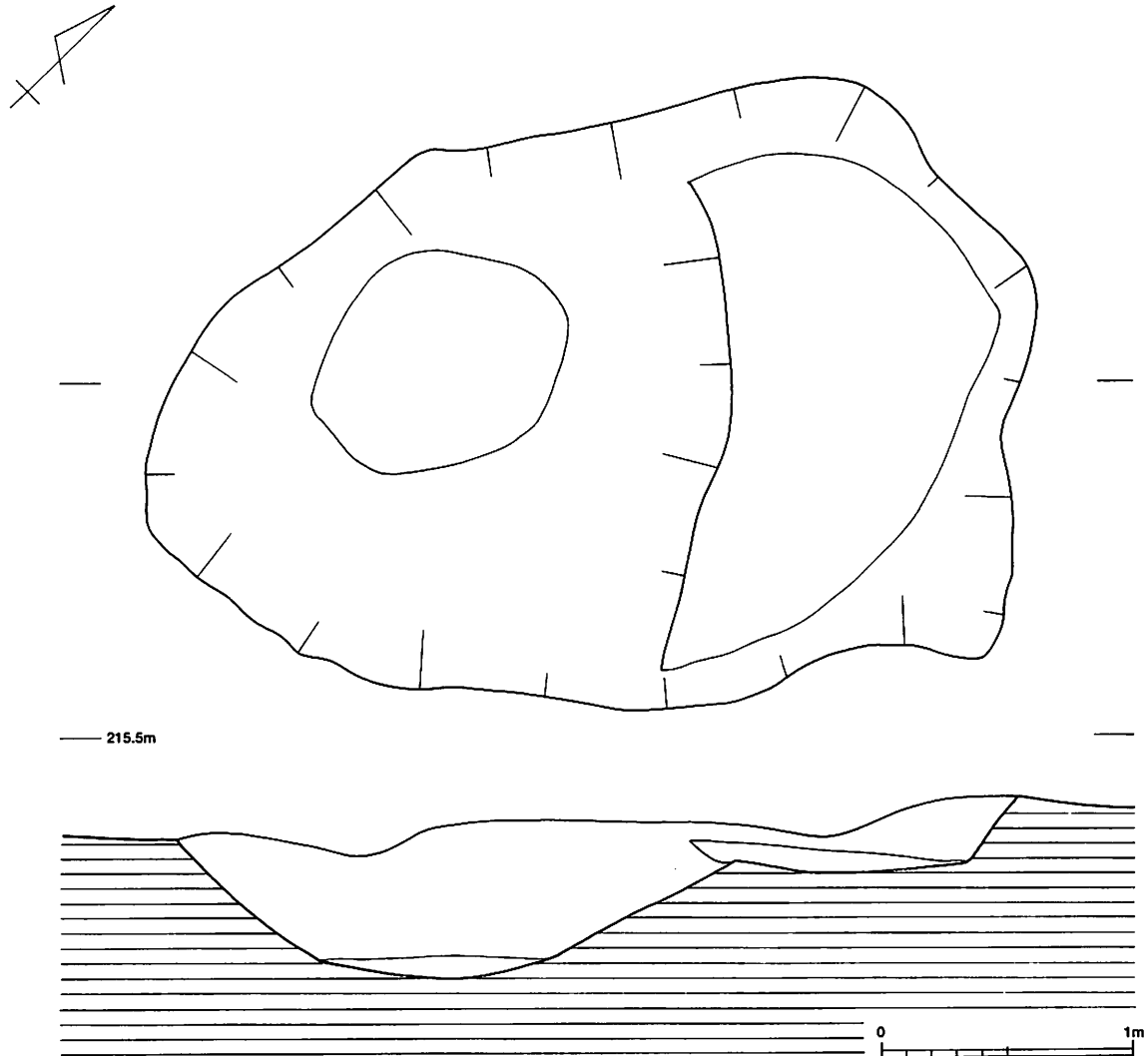
S X 4 (第 24 図, 図版 11 c)

B-2 区のほぼ中央部に位置する。北東 1.4 m に S K 21, 南東 1.0 m に S K 22, 北 0.1 m に S X 3 がある。平面形は不整な楕円形で, 規模は北東~南西方向 3.4 m, 北西~南東方向 2.5 m, 深さ 0.6 m である。二段に掘り込まれ, 北東側の上端から 0.2 m 下に 2.0 m × 1.1 m の平坦面があり, その下 0.5 m に円形で径約 0.9 m のゆるやかに窪んでいる底面がある。S X 3 と同様に性格は不明であるが, 平面形が不整形で底面が平坦でないことなどから, 土取り跡の可能性も考えられる。埋土から土師質土器皿 (30), 瓦質土器鍋 (31) の破片が出土した。

出土遺物 (第 27 図, 図版 23)

土師質土器

皿 (30) 底部~体部の 4 分の 3 の破片である。体部は内湾状に立ち上がり, 底部は静止糸切りで, 器厚は薄くなっている。底径は 4.5 cm である。調整は内外面ともに回転ナデで, 内面には底部から口縁部に向けてヘラ状工具を用いた回転を利用した成形痕が残っている。



第 24 図 S X 4 実測図 (1 : 30)

## 瓦質土器

鍋（31） 口縁部の5分の1以下の破片で、内湾状に立ち上がる器形と思われる。外面に断面が台形の突帯が貼り付けられている。調整は、内外面ともに丁寧なナデである。

## 6 B-3区（第25図）

B-3区の遺構面の標高は214.0～214.5mで、土層の堆積状況から旧地形も現在の地形と同様に南北方向に傾斜していたと考えられる。

検出した遺構は土坑2基、小土坑などである。遺物は、須恵器・土師質土器・陶磁器の破片が出土している。

### SK 23（第26図，図版12 a）

B-3区の北半部に位置する土坑である。南5.5mにSK 24がある。平面形は円形で、規模は径約1.0m、深さ0.2mである。底面は径約0.3mの円形で中央からやや北東に寄っており、平坦である。

遺物は出土していない。

### SK 24（第26図，図版12 b）

B-3区の北半部に位置する土坑である。北5.5mにSK 23がある。平面形は不整な円形で、規模は径約1.8m、深さ0.2mである。底面は径約1.4mの不整な円形で、平坦であるが、北東部に径0.2m、深さ0.2m、南西部に径約0.4m、深さ0.2mの柱穴がある。

遺物は、須恵質土器の甕（38）が出土している。

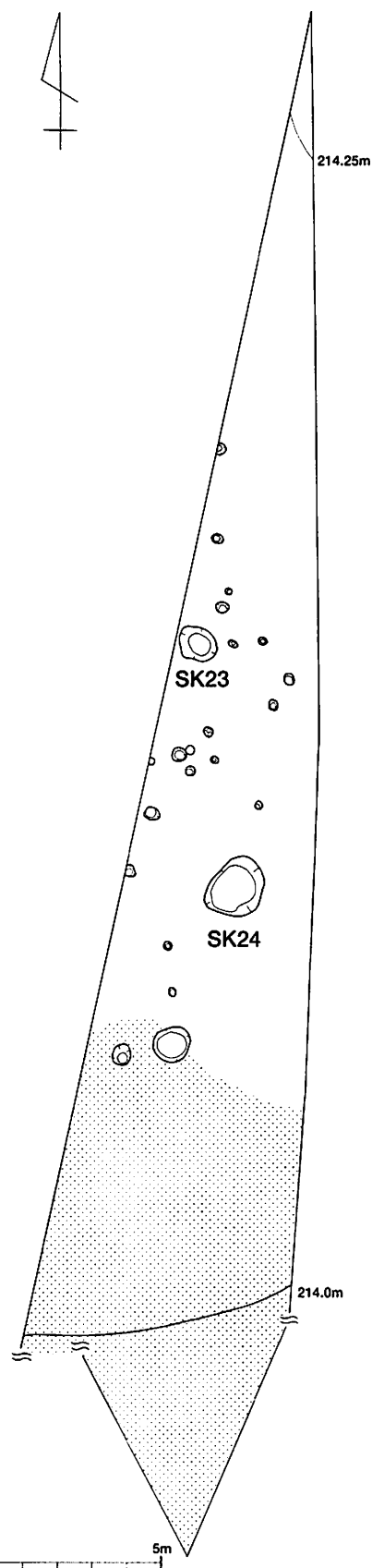
## 出土遺物（第27図）

### 須恵質土器

甕（38） 口縁部～頸部の5分の1以下の破片で、大型の製品であったと思われる。頸部より口縁部にかけては大きく外反しながら立ち上がり、端部は中央を窪ませて、両端部をやや上方につまみあげて終わる。口縁部外面には断面が三角形の突帯を貼り付けており、調整は口縁部・頸部は内外面ともにヨコナデで、肩部の外面は平行叩き、内面は同心円文が残っている。胎土は1mm以下の砂粒を少し含み、焼成は良好である。

## B区出土遺物（第27図，図版23）

### 石器



第25図 B-3区遺構配置図(1:200)

石斧（40） 小型の蛤刃石斧である。両側面には1対のごく浅い抉り込みがあり、その周辺には表面の荒れが観察できる。基端には、柄を装着していた時についたと思われる剝離痕がある。刃部には全体に潰れがあり、使用時についたと思われる剝離痕もみられる。重量は156.3 gである。

石製品

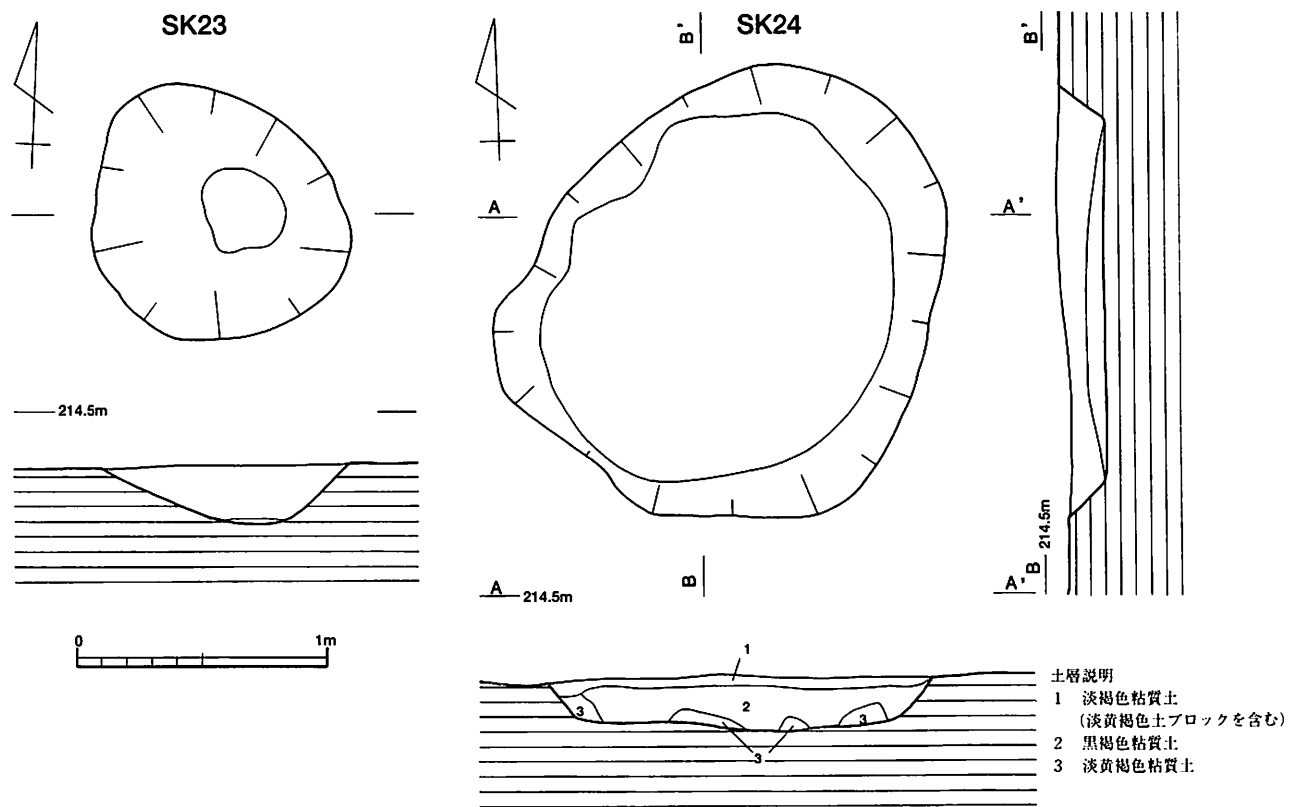
茶臼（39） 石英安山岩製の茶臼である。擦面は8分割で副溝は約4本である。擦目の状態から左回りの臼である。中央には軸を固定する方形の穴が貫通しており、これを中心として直径約12 cmの範囲が周囲よりもわずかに窪んでいる。芯棒孔周辺は特に摩滅が激しいため擦目が不明瞭である。廃棄された時点で擦面周辺を打ち欠き、ほかの用途に転用された可能性がある。

土製品

円盤形土製品（41） 底径4.2 cm、高さ2.6 cmで上面の周辺部を少しずつ打ち欠いた後、形を整えて円形にしている。中心部に孔を開けようとした痕跡があるが、貫通していない。紡錘車の未製品の可能性も考えられる。胎土は1 mm以下の砂粒を少し含み、焼成は良好である。

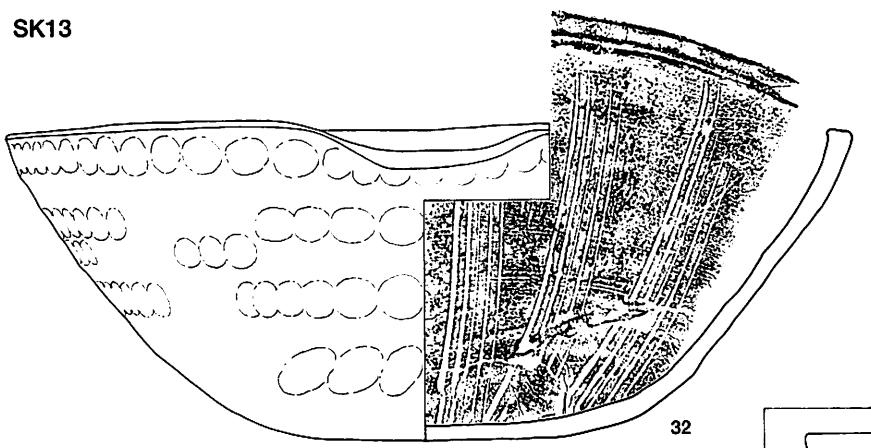
土師質土器

皿（42～47） 口縁部・体部が内湾状に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。42は体部の器厚を薄く仕上げたもので、底部は回転糸切りから板目痕を残している。調整は体部内外面ともにナデである。43は器厚が厚く、ロクロ成形時の凹凸を全体的に残している。底部は静止糸切り後未調整で、体部は内外面ともに回転ナデである。44は底部～体部の約4分の1の破片であ

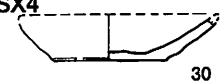


第26図 SK 23・24 実測図（1：30）

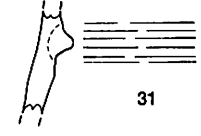
SK13



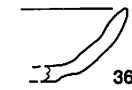
SX4



30

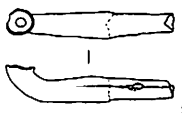


31

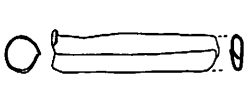


36

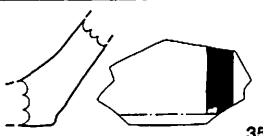
SK22



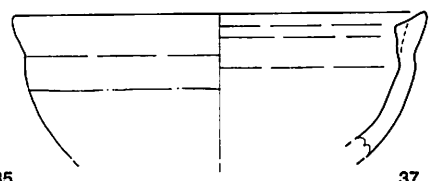
33



34

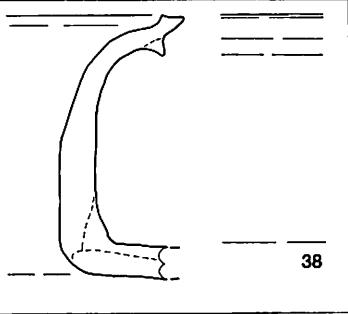


35



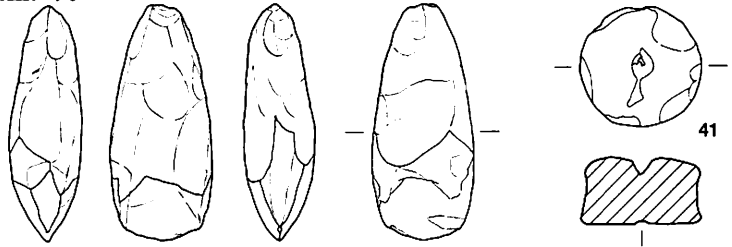
37

SK24

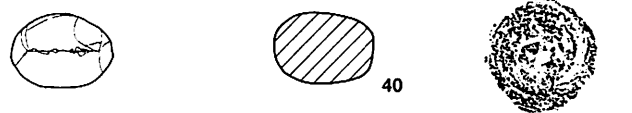


38

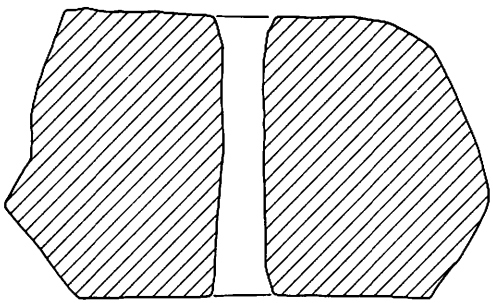
調査区内



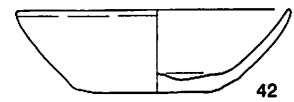
41



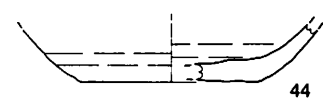
40



39



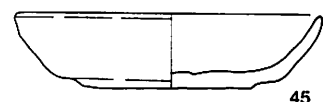
42



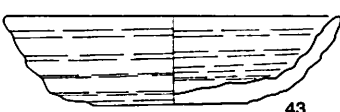
44



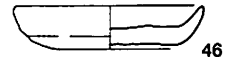
43



45



46



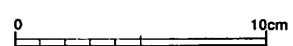
47



43



47



第 27 图 B区出土遺物実測図 (1 : 3)

る。体部には内外面ともにヘラ状工具による条痕が残り、やや厚めの底部裏にはハケ目状の条痕がある。45は体部の器厚を薄く仕上げたもので、底部は回転糸切り、内部をヘラ状工具でらせん状に削った跡を残している。体部の調整は内面が回転ナデ、外面がナデである。46・47は口縁部・体部が内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかにつまみ丸く終わる。底部の器厚を厚く仕上げたもので、調整は内外面ともに回転ナデである。46は回転糸切り後、指頭による成形痕がみられる。47は底部内面にヘラ状工具による条痕が残る。

## 7 C区 (図版 13 a)

C区は遺跡の南東側に位置する調査区である。遺構面の標高は214.5～215.0 mで、土層の堆積状況から旧地形も現在の地形と同様に南北方向に傾斜していたと考えられる。

遺構は存在しなかったが、調査区内から縄文土器・弥生土器・須恵器の破片が出土している。

### C区出土遺物 (第28図, 図版24)

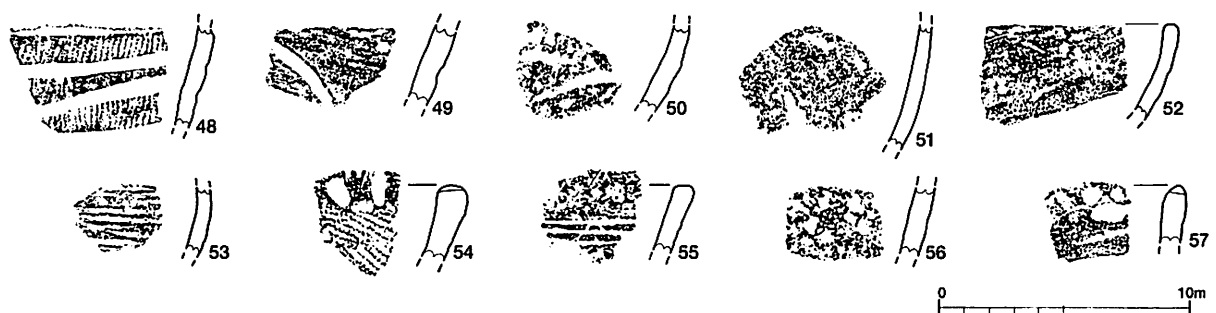
#### 縄文土器

鉢 (48～57) 48は磨消縄文土器で、縄文帯の幅は広く、それを区切る沈線も太い。器形は深鉢と考えられる。49は貝による磨消擬縄文をつけたものである。50・52は条痕文土器で、50は摩滅により浅くなっているが太い沈線も施されている。52は口縁端部がやや肥厚し内湾した器形で、浅鉢と考えられる。54・55・57は口縁部の破片である。54は口縁部を肥厚させ、端部に刻み目を施している。外面には縄文が施され、内面には磨きの跡が認められる。55は端部がわずかに肥厚し、平坦面をつくっており、浅鉢と考えられる。外面には細い沈線が3条施されている。57は端部がわずかに肥厚し、丸く終わり、刻み目を施している。内面には条痕調整の跡が残っている。

## 8 D区 (第29図, 図版14 a)

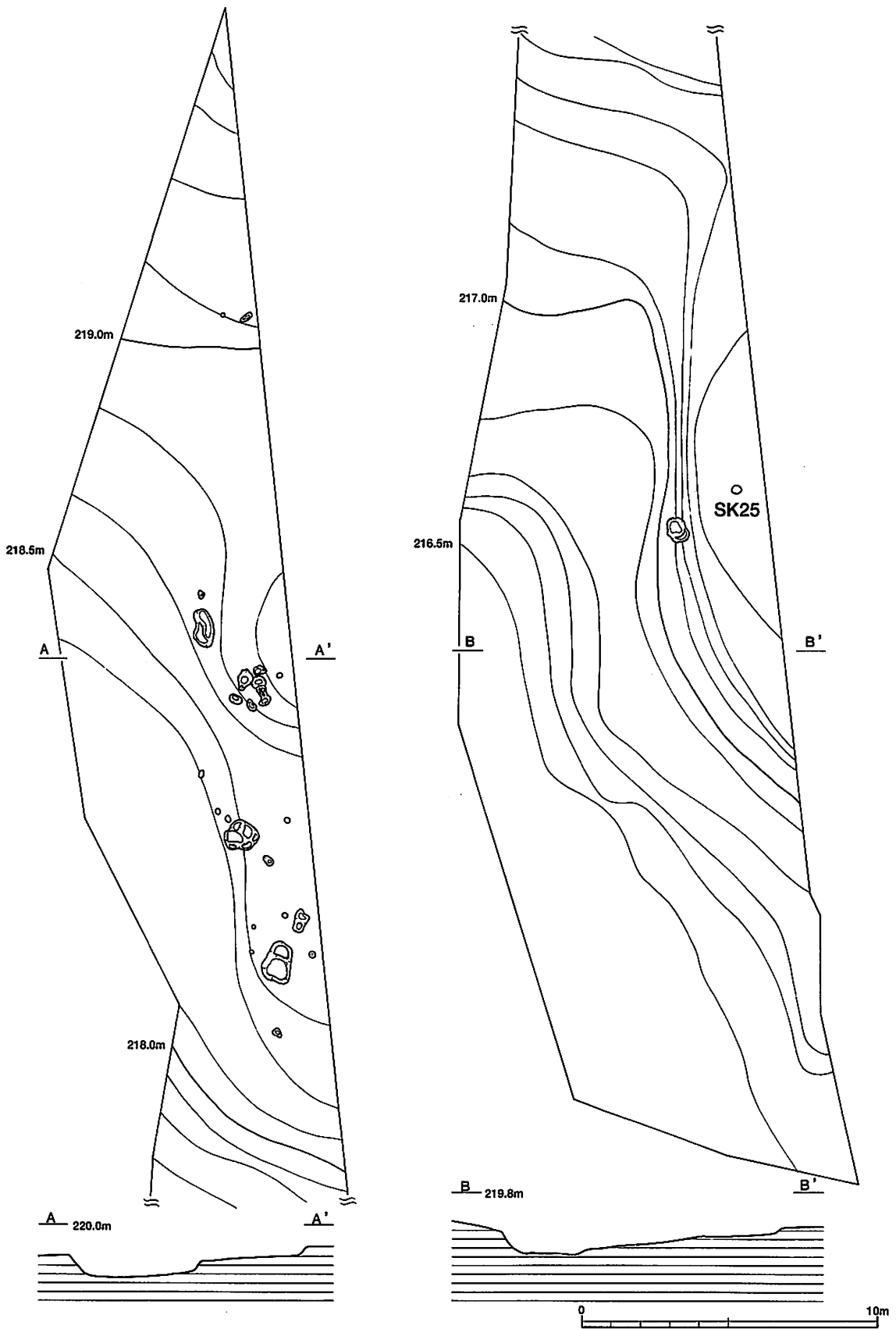
D区は遺跡の中央部北側に位置する調査区である。遺構面の標高は218～221 mで、土層の堆積状況から旧地形も現在の地形と同様に南北方向に傾斜していたと考えられる。

検出した遺構は土坑1基、小土坑などである。調査区内から弥生土器・須恵器・陶磁器の破片など幅広い時代の遺物が出土している。



第28図 C区出土遺物実測図 (1:3)





第 29 图 D区遺構配置図 (1 : 200)

S K 25 (第30図, 図版14 b・c)

D区の南半部に位置する土坑である。平面形は南北方向にわずかに長い楕円形で、規模は北西～南東方向1.1 m, 北東～南西方向0.9 m, 深さ0.2 mである。底面は楕円形で、中心部がわずかに窪んでいる。土坑内部が底面を残してぐるりと赤化しており、火熱を受けている(アミ目)と思われる。中には角礫が入り込んでおり、焼けて赤化しているものもあり、炭化物も検出された。赤化面までの埋土は暗灰褐色土で、炭化物・小礫を含んでいる。

遺物は出土していない。

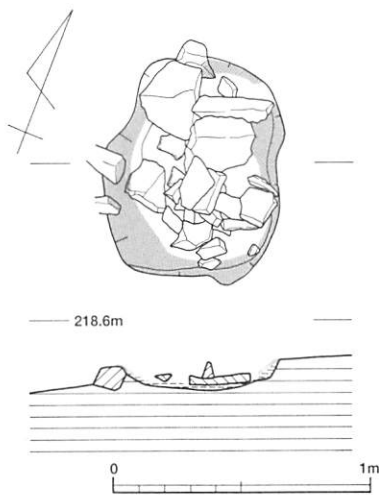
D区出土遺物(第31図, 図版24)

弥生土器

壺(60) 口縁部の破片である。外反しながら立ち上がり、端部は下方にやや拡張している。端部に2条の凹線が施されている。調整は外面がナデ、内面は横ナデ後、横方向を中心とした不定方向のヘラ磨きである。胎土は1 mm以下の砂粒を少し含み、焼成は良好である。

須恵器

杯(58) 体部は底部から緩やかに内湾しながら伸び、端部は丸く終わる。調整は、内外面ともに回転ナデである。底部はヘラによる切り離しの後にナデている。復元口径は13.4 cmである。

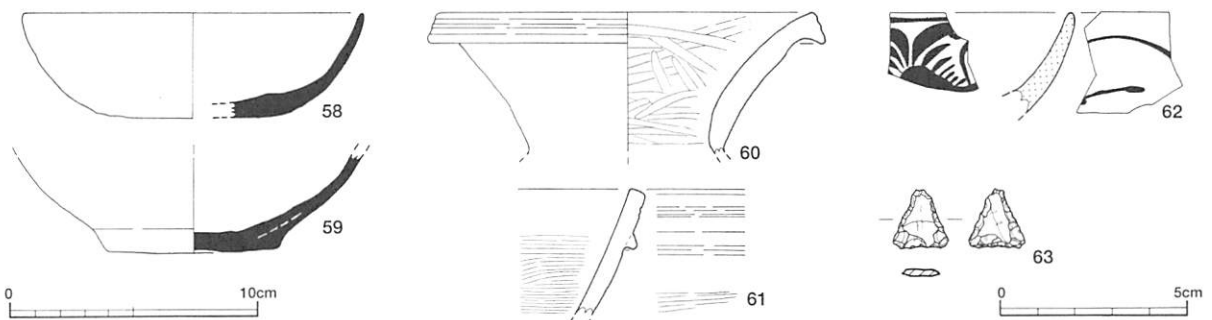


第30図 S K 25実測図(1:30)

椀(59) 底部は平高台で回転によるヘラによる切り離しで、高さは0.5 cm程度である。ヘラ切り後、指頭で丁寧にナデている。体部は斜上方に内湾して伸びると思われ、調整は内外面ともに回転ナデである。

瓦質土器

鍋(61) 口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がり、端部には内傾した平坦面をもつ。外面に2条の条痕があり、断面台形の突帯が貼り付けられている。調整は、口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部は内外面ともに横方向のハケ目である。体部外面の上方には煤が付着している部分がある。



第31図 D区出土遺物実測図(土器1:3, 石器1:2)

## 磁器

皿（62） 肥前系の染付皿の破片である。胎土は緻密で少し灰色が強い。

## 石器

石鏃（63） 打製の石鏃である。平基式で、側縁の形態は直線的で、背面・腹面とも細かな二次加工は縁辺のみにとどまり、中心部には至らない。そのため、中心部は平坦であり腹面に素材時の剝離面を残している。先端部は欠損しており、使用時もしくは廃棄時に折れたものと考えられる。

## 9 E区（第32図，図版17c）

E区は遺跡の北東側に位置する調査区である。遺構面の標高は221.7m前後である。検出した遺構は土坑2基と性格不明の遺構2基，小土坑などである。調査区内から弥生土器・須恵器・土師器の破片が出土している。

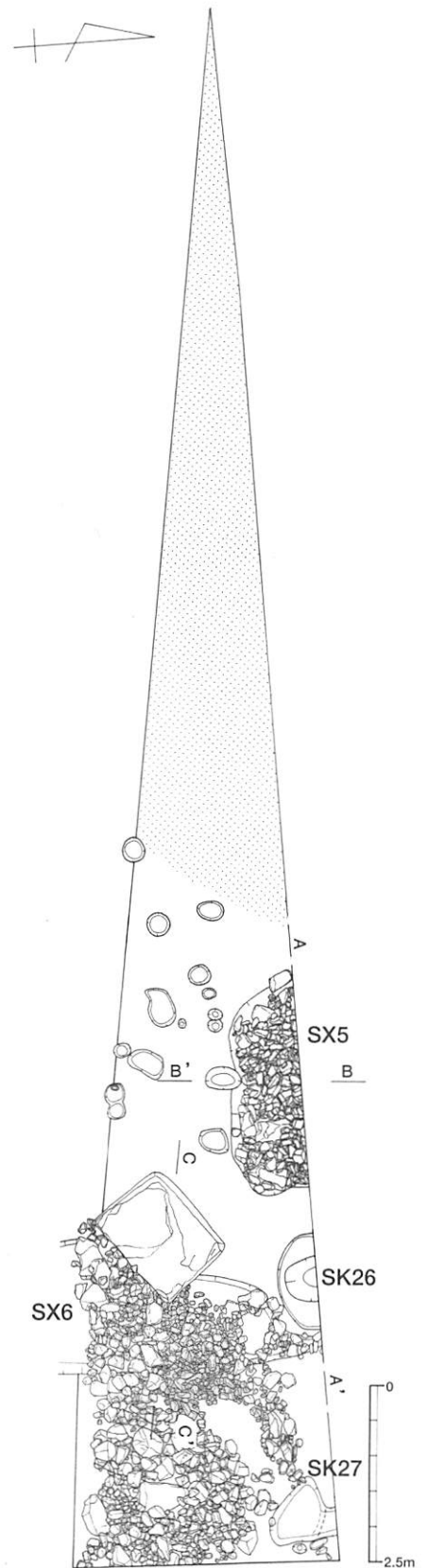
### SX5（第32・33図，図版16a～c）

E区の東半部，北側調査区境に位置する。東0.7mにSK26，南東0.9mにSX6がある。北半分が調査区外になるため平面形は不明であるが，検出部分の形状から長方形と考えられる。規模は検出部分で東西方向3.0m，南北方向1.0m，で湧水してきたため深さは不明である。底付近と思われる部分に50～90cm×40～60cm程度の大きな石が詰まっており，その隙間や上の部分に一辺20cm程度の川原石と小石が詰まっていた。底面と推定される部分は砂質土であった。

遺物は出土していない。

### SX6（第32・33図，図版15b・c）

E区の東半部，南側調査区境に位置する。北1.2mにSK26，北東0.9mにSX5がある。遺構の西側に1.5m×1.2mの大石があり，南側は削平され平面形は確認できなかった。規模は検出部分で東西方向2.7m，南北方向1.5m，深さは約0.7mである。大石の東側部分には一辺約50cm程度の石と小さい川原石が詰まっていたため，床面の状況を確認することはできなかった。遺物は出土していない。



第32図  
E区遺構配置図（1：100）

**SK 26** (第 32・33 図, 図版 17 a)

E 区の東半部, 北側調査区境に位置する。西 0.7 m に SX 5, 南 1.2 m に SX 6 がある。検出部分の形状から不整円形と考えられる。規模は検出部分で東西方向 1.3 m, 南北方向 0.5 m で, 二段に掘り込まれており, 南側の上端から 6 cm 下に 1.3 m × 0.5 m の平坦面があり, その下 0.3 m に検出部分 0.3 m × 0.2 m の楕円形と思われる底面がある。遺物は出土していない。

**SK 27** (第 32 図, 図版 17 b)

E 区の北東端に位置する。西 2.0 m に SK 26, 南西 3.0 m に SX 7 がある。平面形は不整楕円形で, 規模は北西～南東方向 1.0 m, 北東～南西方向 0.7 m, 深さ 0.2 m である。底面は不整楕円形で, ほぼ平坦である。遺物は出土していない。

**E 区出土遺物** (第 34 図, 図版 24)

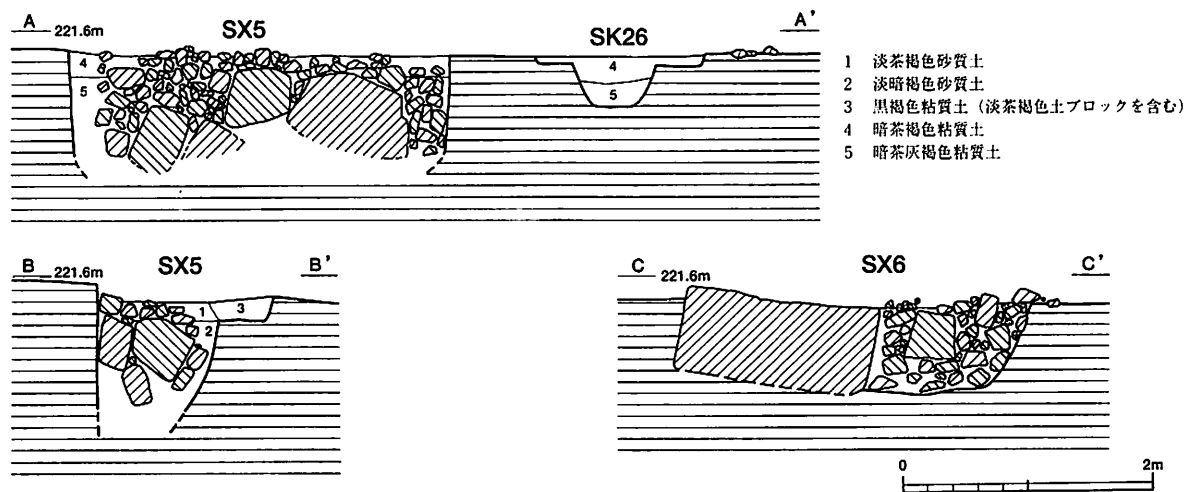
土師器

甕 (64) 口縁部はやや外反気味に斜方向に伸び, 端部はわずかに細く丸く終わる。調整は口縁部内外面ともにヨコナデ, 胴部上方外面には縦方向のハケ目が残る。

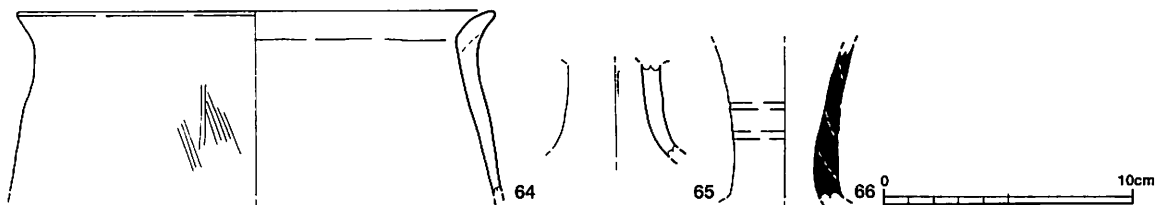
高杯 (65) 脚柱上部の破片である。調整は内外面ともにヨコナデである。

須恵器

壺 (66) 長頸壺の口頸部の破片である。外面中央部に, ヘラ状工具で施されたと思われる条痕が 2 条みられる。調整は内外面ともに回転ナデである。



第 33 図 SX 5・6, SK 26 断面図 (1 : 60)



第 34 図 E 区出土遺物実測図 (1 : 3)

## 10 F区 (第35図, 図版21c)

F区は遺跡の南東側に位置する調査区である。遺構面の標高は219.7m前後である。近接・重複した竪穴住居跡4軒と性格不明の遺構3基, 土坑1基, 柱穴などを検出した。調査区内から弥生土器・須恵器・土師器の破片, 石器などが出土している。

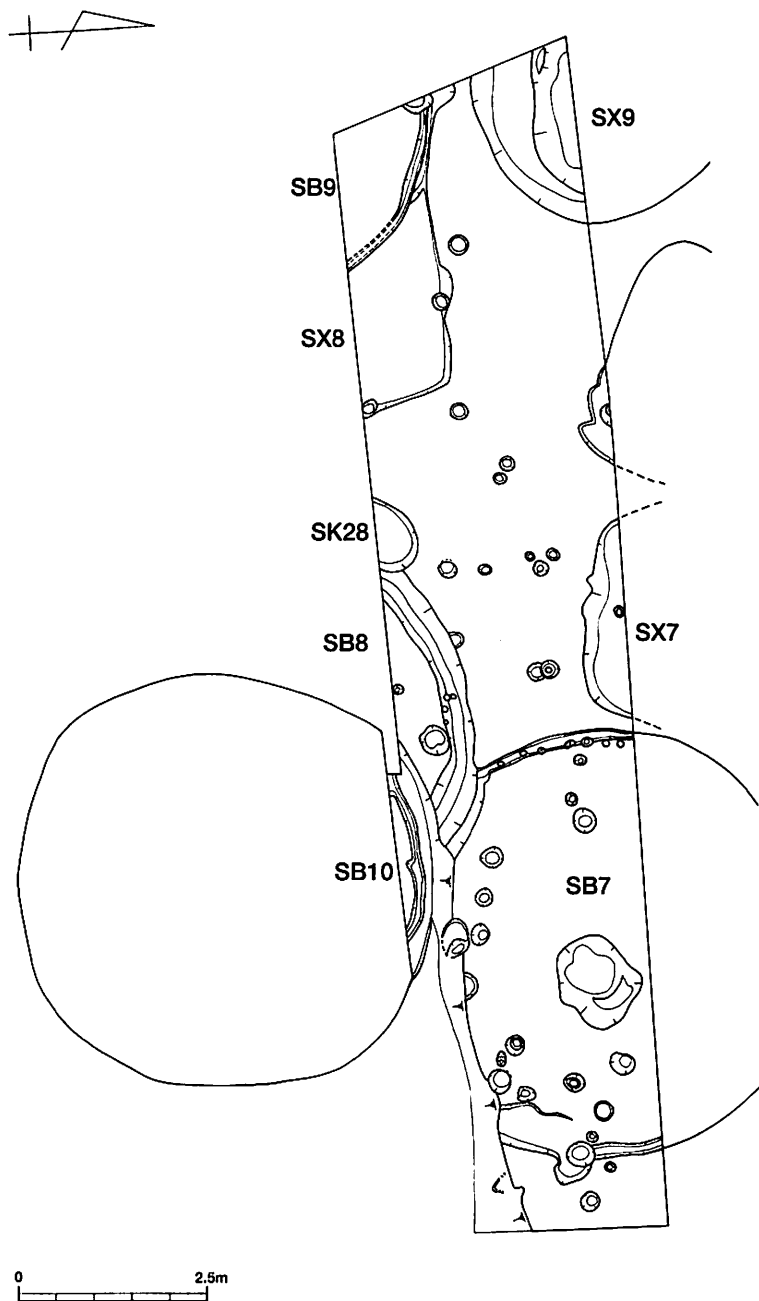
### SB7 (第36図, 図版18a~c)

F区の東半部に位置する。西0.2mにSX7があり, 南西側に重複してSB8とSB10がある。北側・南側の一部が調査区外のため形状は不明であるが, 検出部分の形から円形と考えられる。

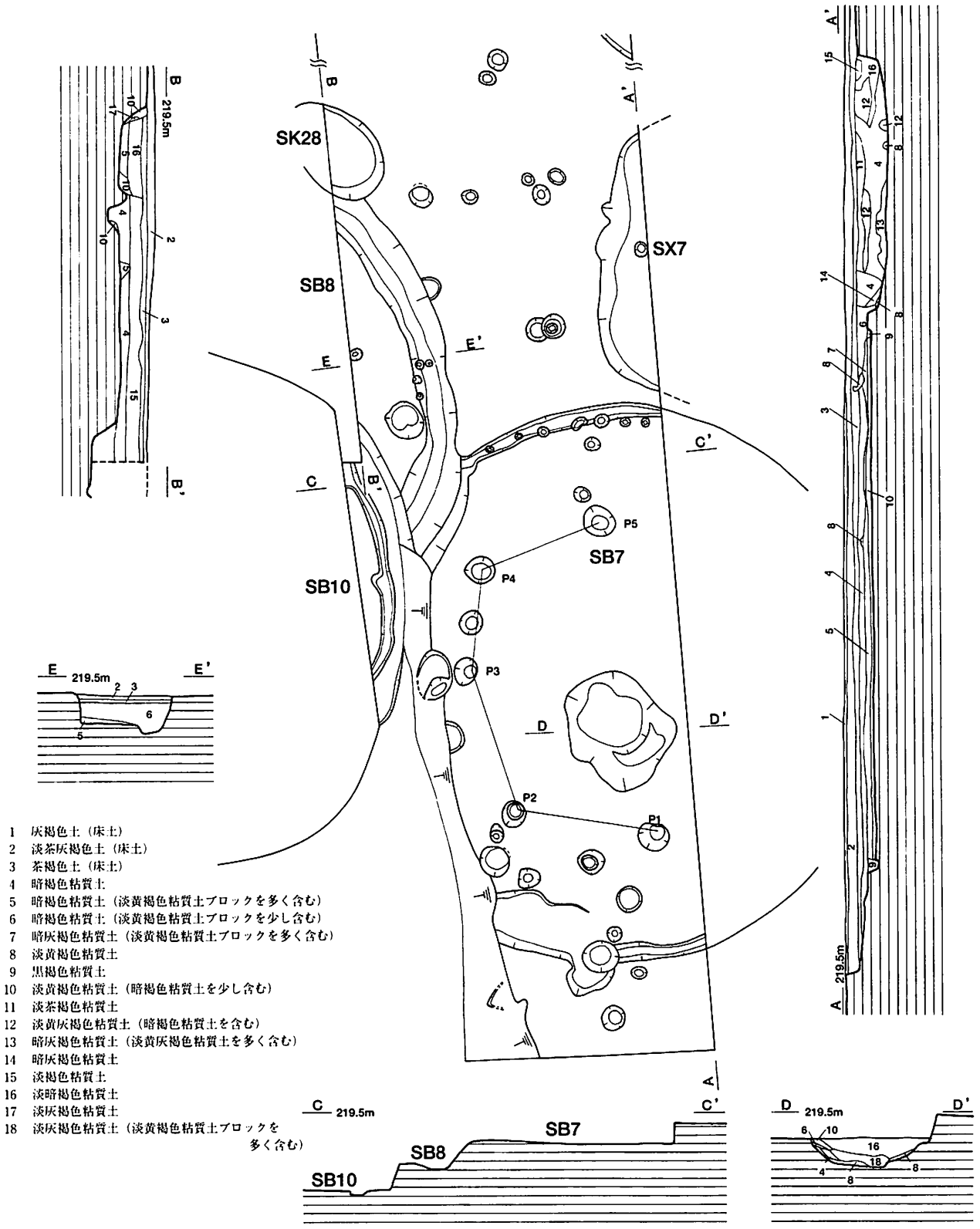
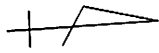
規模は検出部分で東西方向5.7m, 南北方向2.5mである。床面は平坦で, 径約5.6mと推定される。床面の東側と西側に, 幅約0.2m, 深さ約0.1mの壁溝がある。柱穴は13基検出されたが, そのうち支柱穴が5基(P1~5)で, 配列からすると調査区外にあと3基あるものと考えられ, 8本柱構造と推定される。柱穴の規模は, P1は径約0.3m, 深さ0.6m, P2は径約0.3m, 深さ0.7m, P3は径約0.3m, 深さ0.6m, P4は径約0.3m, 深さ0.5m, P5は径約0.3m, 深さ0.5mである。柱間距離はP1~P2が1.5m, P2~P3が1.5m, P3~P4が1.1m, P4~P5が1.3mである。

床面には厚さ10cm前後の貼床が検出されたが, その下部には遺構がなかった。

床面の中央付近で二段に掘り込まれている不整円形の土坑は, 周辺から炭化物が出土していることから炉跡と考えられる。規模は東西方向1.3m, 南北方向1.1m, 深さ0.3m, 北東側の掘方から約0.2m下に約0.5m×0.2mの平坦面が



第35図 F区遺構配置図 (1:100)



第36図 F区東半部実測図 (1:60)

あり、その平坦面から7 cm下に約0.6 m×0.7 mの平坦な底面がある。SB7・8・10の新旧関係は、平面形の切り合い関係や土層などから、古い順にSB7→SB8→SB10と考えられる。炉跡周辺から鉄滓、埋土から弥生土器甕の胴部(67)が、炉跡から弥生土器片(82)、石鏃(85)、砥石(84)が出土した。

#### 出土遺物(第37図, 図版24)

##### 弥生土器

甕(67) 胴部の3分の1の破片である。胴部の最大径は中位よりやや上にあり、復元径で22.3 cmである。調整は、胴部外面上部はヨコナデ、中部から下半は縦方向のヘラ磨き、肩部にヘラ状工具による刺突文がある。内面は上部横方向、下部縦方向のヘラ削りである。胎土は1~3 mmの砂粒を多く含み焼成は良好である。

甕(82・83) 82の口縁部は「く」字状に外反した後、やや平らに終わり、ヘラ状工具による刻目が施されている。胴部上半には2条の平行沈線が2か所に施されている。調整は口縁部内外面ともにヨコナデ、胴部内外面は横方向のヘラ磨きである。83は端部を欠いており、外面には、多条の沈線が巡っている。82・83とも胎土は1 mm程度の砂粒を多く含み焼成は良好である。弥生前期後半のものと思われる。

##### 石器

石鏃(85) 打製の石鏃である。平基式で、基部にわずかな抉りがみられ、側縁の形態は内膨みである。背面・腹面とも細かな二次加工は縁辺に施されるにとどまり、中心部には至らない。そのため、中心部はほぼ平坦で腹面に素材時の剝離面を残している。先端部は欠損しており、使用時もしくは廃棄時に折れたものと考えられる。

##### 石製品

砥石(84) 方柱状を呈している。3面を使用しており、擦痕もみられる。特に右側面の使用頻度が高く、磨り減って湾曲気味である。

#### SB8(第36図, 図版19b)

F区の東半部、南側調査区境に位置する。北1.5 mにSX7があり、北東側でSB7と、南東側でSB10と、西側でSK29と重複している。

北側の一部のみ確認することができた。南部分が調査区外のため形状は不明であるが、検出部分の形から円形と考えられる。規模は検出部分で東西方向3.1 m、南北方向1.0 m、壁高は北壁で0.3 mである。床面はほぼ平坦で、径約4.8 mと推定される。北側壁面に沿って幅約0.4 m、深さ0.1~0.2 mの壁溝が確認された。溝の周辺で径0.1 m程度、深さ約0.1 mの小穴が4個近接して検出された。柱穴・炉跡は検出されなかった。

SB7・8・10の新旧関係は、前述の通りSB7→SB8→SB10と考えられる。

埋土から弥生土器の甕など(70~73・75・76)や土師器の甕(74)の破片が出土した。

## 出土遺物（第 37 図，図版 24）

### 弥生土器

甕（70～73） 70は口縁部が「く」字状に外反し，端部は上下に肥厚し，丸く終わっている。口縁部外面に3条の凹線が施されている。調整は，口縁部内外面はヨコナデ，胴部内面の上部は横方向のヘラ削りと考えられる。胎土は1mm以下の砂粒を少し含み焼成は良好である。71は口縁部がゆるやかに外反し，端部は丸く終わり，ヘラ状工具による刻目が施されている。調整は口縁部内外面ともに丁寧なヨコナデである。胎土は1～2mmの砂粒を多く含み焼成は良好である。弥生前期後半期の可能性がある。72・73はいずれも小片である。胎土は1～2mmの砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

### 土師器

甕（74） 山陰系の二重口縁の土器で，口縁部の10分の1以下の破片である。口縁部は外方に薄く引き出し，擬口縁端部は突き出し丸く細く納めている。調整は口縁部内外面ともにヨコナデである。胎土は密で焼成は良好である。

## SB 9（第 38 図，図版 19 c・20 a）

F区の西端，南西側調査区境に位置する。北0.5mにSX 9があり，東側でSX 8と重複している。北東部分のみ確認することができ，柱穴・炉跡は検出されなかった。形状は不明であるが，検出部分の形から円形と考えられる。規模は検出部分で東西方向1.8m，南北方向1.4m，壁高は北東壁で0.2mである。床面はほぼ平坦で，径約5.5mと推定される。北東側壁面に沿って幅約0.1m，深さ約0.1mの壁溝が検出された。壁溝は，北端で推定径0.4m，深さ0.5mの柱穴と重複しているが，土層などからこの柱穴はSB 9に伴うものではなく，SB 9よりも後に掘られたものと考えられる。SX 8との新旧関係は，平面形の切り合い関係や土層などからSB 9がSX 8よりも古いと考えられる。埋土から土師器の甕（77・78）の破片が出土した。

## 出土遺物（第 37 図）

### 土師器

甕（77・78） ともに口縁部の10分の1以下の破片である。口縁部はやや外反気味に斜方向に伸び，端部はわずかに細く丸く終わる。調整は口縁部内外面ともにヨコナデである。胎土は1～3mmの砂粒を多く含み焼成は良好である。

## SB 10（第 36 図，図版 21 b）

F区の東半部，南側調査区境に位置する。北西側でSB 8と，北側でSB 7と重複している。北側の一部分のみを確認することができた。ほとんどの部分が調査区外のため形状は不明であるが，検出面の形から円形と考えられる。規模は検出面で東西方向3.2m，南北方向0.6mである。床面は径約5.1mと推定される。北側に幅約0.1m，深さ約0.1mの壁溝が検出された。柱穴・炉



跡は検出されなかった。S B 7・8・10の新旧関係は、前述の通りS B 7→S B 8→S B 10と考えられる。埋土から弥生土器の甕（79・80）や土師器の甕（81）の破片が出土した。

#### 出土遺物（第37図）

##### 弥生土器

甕（79・80）ともに口縁部の10分の1以下の破片である。口縁部は「く」字状に外反し、79の端部は上下に肥厚していると考えられるが、80はわずかに薄く丸く終わっている。調整は、口縁部内外面ともにヨコナデである。胎土は1mm以下の砂粒を少し含み焼成は良好である。

##### 土師器

甕（81）口縁部の10分の1以下の破片である。口縁部はやや外反気味に斜方向に伸び、端部はわずかに細く丸く終わる。調整は口縁部内外面ともにヨコナデである。胎土は1mm以下の砂粒を含み焼成は良好である。

#### S X 7（第36図，図版19 a）

F区の中央部，北側調査区境に位置する。東0.2mにS B 7，南1.5mにS B 8がある。南側の一部分を確認することができた。北側のほとんどの部分が調査区外のため形状は不明である。規模は検出部分で東西方向2.7m，南北方向0.6m，深さは約0.3mである。床面の状況は検出部分だけでは判断できないが，径0.2m，深さ0.1mの小穴を1基確認した。

埋土から弥生土器の甕（69）や土師器の甕（68）の破片が出土した。

#### 出土遺物（第37図）

##### 弥生土器

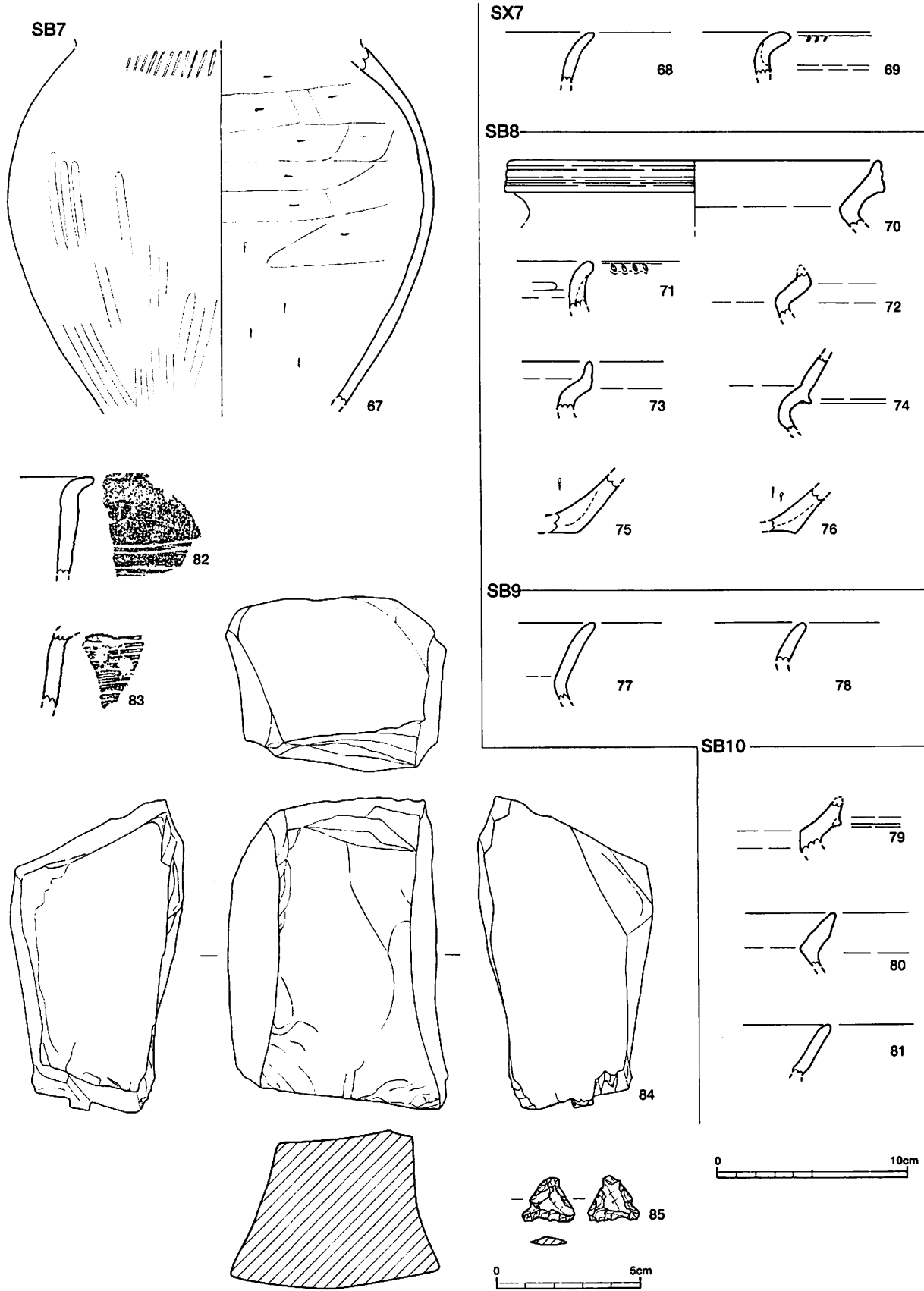
甕（69）口縁部の10分の1以下の破片である。口縁部は「く」字状に外反し，口縁端部は厚く丸く終わり，ヘラ状工具による刻目が施されている。調整は口縁部内外面ともに丁寧なヨコナデである。胎土は1～2mmの砂粒を少し含み焼成は良好である。

##### 土師器

甕（68）口縁部の10分の1以下の破片である。口縁部はゆるやかに外反し，口縁端部はやや薄く丸く終わる。調整は口縁部内外面ともに丁寧なヨコナデである。胎土は1mm程度の砂粒を多く含み焼成は良好である。

#### S X 8（第38図，図版20 a～c）

F区の西半部，南側調査区境に位置する。北西1.1mにS X 9があり，西側でS B 9と重複している。北東側の一部分を確認することができた。その他の部分が調査区外のため形状は不明であるが，検出面の形から方形と考えられる。規模は検出部分で東西方向2.6m，南北方向1.2m，



第 37 图 F 区出土遗物实测图 (土器·砥石 1 : 3, 石鏃 1 : 2)

深さは約 0.2 m である。床面はほぼ平らである。北側と東側の壁面に接した位置で小穴を検出した。北側の小穴は径 0.2 m、深さ 0.2 m、東側の小穴は径 0.2 m、深さ約 0.2 m である。性格は不明である。埋土上層から砥石（86）が出土した。

### 出土遺物

（第 39 図，図版 24）

#### 石製品

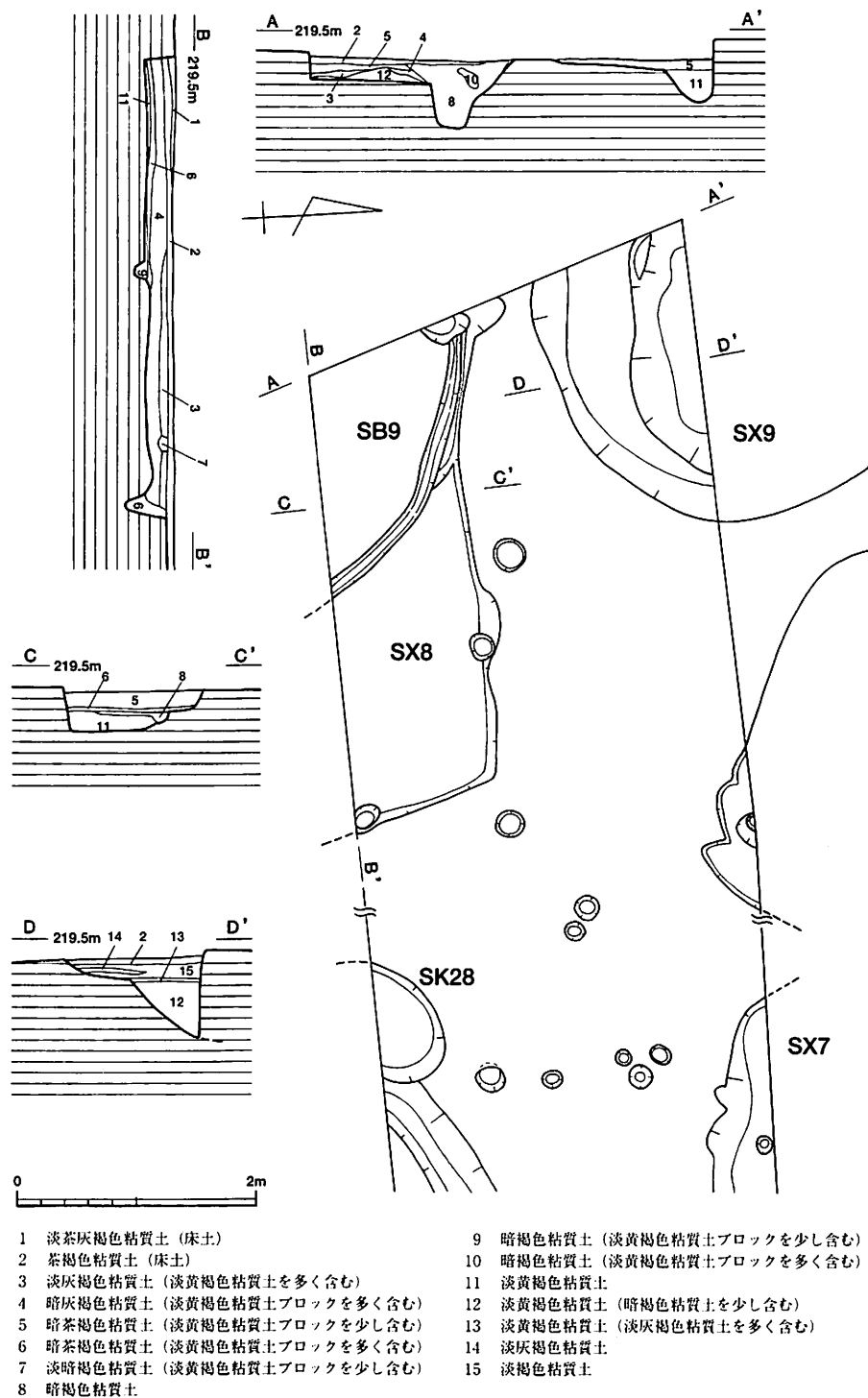
砥石（86） 板状を呈し、表裏 2 面を使用している。擦痕もみられる。特に図面上側の面は使用頻度が高く、磨り減ってわずかに湾曲気味である。

S X 9（第 38 図，図版 20 c・21 a）

F 区の西端，北西側調査区境に位置する。

南 0.5 m に S B 9 があり，南東 1.1 m に S X 8 がある。南東部分を確認することができた。

西側と北東側が調査区外のため形状は不明であるが，検出部分の形から円形と考えられる。規模は検出部分で東西方向 2.7 m，南北方向 1.3 m，深さは約 0.7 m である。二段に掘り込まれており，南側の掘方から 0.1 m 下に幅 0.2 ~ 0.5 m の平坦面が掘方に沿ってあり，その平坦面から約 0.4 m 下に底面がある。



第 38 図 F 区西半部実測図（1 : 60）

調査区外になるが、S X 9 の続き部分の検出面から土師器甕と須恵器の破片が出土した。

#### S K 28 (第 38 図)

F 区の中央部、南側調査区境に位置する。北 2.3 m に S X 7、西 1.1 m に S X 8 があり、東側で S B 8 と重複している。

南半分が調査区外になるため平面形は不明であるが、検出面の形状から楕円形と考えられる。規模は検出部分で東西方向 0.9 m、南北方向 0.5 m、深さ 0.3 m である。底面も同様な楕円形でゆるやかに窪んでいる。

S B 8 との新旧関係は、平面形の切り合い関係や土層などから S K 29 が S B 8 よりも新しいと考えられる。

遺物は出土していない。

#### F 区出土遺物 (第 39 図, 図版 24)

##### 弥生土器

甕 (87) 口縁部の 10 分の 1 以下の破片である。口縁部が「く」字状に外反し、端部は上下に肥厚し、丸く終わっている。口縁部外面に 2 条の凹線が施されている。調整は、口縁部内外面ともに丁寧なヨコナデである。胎土は 1 mm 程度の砂粒を少し含み焼成は良好である。

##### 土師器

甕 (88・89) ともに口縁部の破片で、89 の復元口径は 18.6 cm である。口縁部は外方に開いて薄く引き出し、端部は先細り丸く終わる。口縁の接合部はわずかに突出し、先をつまんで納めている。頸部は短く屈曲して口縁に至る。調整は口縁部内外面ともに丁寧なヨコナデで、若干調整時によると思われる凹凸がみられる。89 の頸部以下の内面は横方向のヘラ削りが残っている。外面に一部煤が付着している。胎土はともに 1 mm 以下の砂粒を多く含み焼成は良好である。

##### 須恵器

杯 (91) 高台がつく杯の底部 5 分の 1 以下の破片である。回転ヘラ切りをした底部に、断面三角形の高台が付けられている。復元底径は 6.8 cm である。調整は、内外面ともに回転ナデである。胎土は密で焼成は良好である。

##### 須恵質土器

鉢 (90) 底部の 5 分の 1 以下の破片である。底部は平高台状に削り出している。接地面の幅は 1.0 cm 程度、復元底径は 9.1 cm である。体部はゆるやかに内湾して立ち上がると考えられる。調整は内外面ともに回転ナデで、内面には灰釉が施され、外面にも部分的に釉の付着がみられる。胎土は密で焼成は良好である。

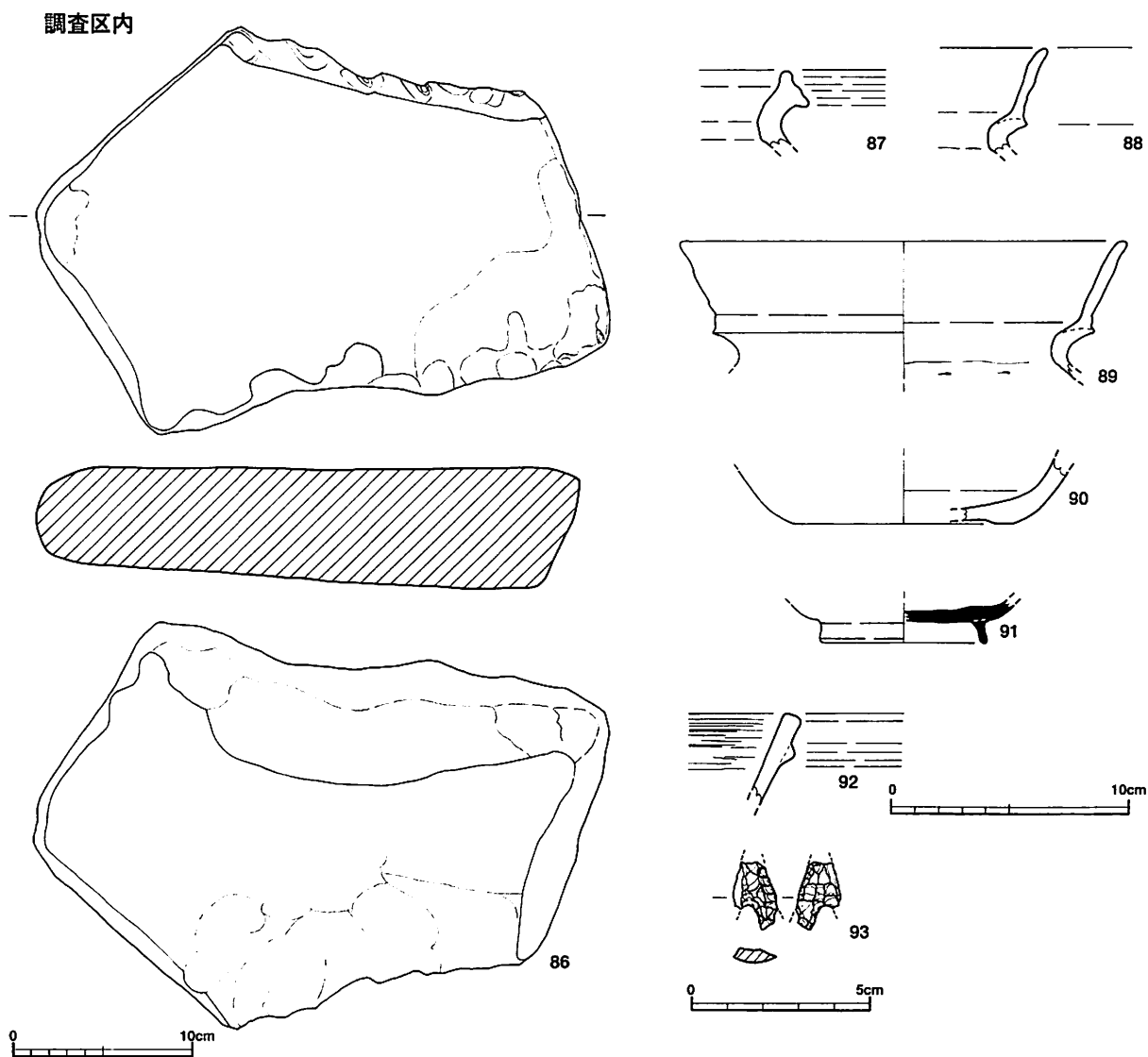
##### 瓦質土器

鍋 (92) 口縁部の 10 分の 1 以下の破片である。口縁部・体部は外上方にのびると思われ、口縁端部は平坦面となる。体部外面上方には、断面台形の突帯が貼り付けられている。調整は口

縁端部と口縁部外面がナデで、口縁部内面は横方向のハケ目である。胎土は密で焼成は良好である。

石器

石鏃（93） 無茎式であり、基部に深い抉りがある。側縁の形態は外膨みで、先端部に側縁に欠損がある。先端部の欠損は古いもので、使用時もしくは廃棄時に折れたものと考えられる。背面・腹面とも細かな二次加工は縁辺に施されるにとどまり、中心部には至らない。そのため、中心部は平坦であり腹面に素材時の剝離面を残している。



第 39 図 F 区出土遺物実測図（土器 1 : 3, 石鏃 1 : 2, 砥石 1 : 4）

## V まとめ

今回の調査では、調査区域が小さく、また離れていたこともあって遺跡の全容については明らかにならなかったが、弥生時代後期中葉から後葉にかけての集落跡を確認することができた。向原町内で弥生時代の住居跡が確認されたのは初例である。また、中世の掘立柱建物跡1棟や土坑、近世の埋桶土坑などを検出し、遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などの土器類のほか石器、石製品なども出土している。ここでは、弥生時代の遺構と遺物を中心に若干の検討を加えてまとめとしたい。

### 弥生時代の遺構と遺物

本遺跡は、北側にある大土山から南流する大土川によって形成された扇状地状の緩斜面に広がり、南側を西流する三篠川によって形成された河岸段丘まで続いている。

遺跡のほぼ中央部に、北側の平畝山から南側に延びる小尾根があり、本来はその小尾根の両側に谷があったと考えられる。本調査では、西側の傾斜変換点にあたるA-1区と東側の変換点にあたるF区で住居跡を確認した。

A-1区のSB1の壁溝から出土した甕(1)は、口縁部が「く」字状に外反し、端部は上下に肥厚している。口縁部外面に4条の凹線、頸部外面にヘラ状工具による刺突文が施されている。調整は口縁部内外面ともにヨコナデで、胴部外面はハケ目調整後ヘラ磨き、内面は肩部横位、下部縦位のヘラ削りである。胴部最大径は上位にある。これらの特徴から弥生時代後期中葉に属すると考えられる。<sup>(1)</sup> SB1からは、同様な特徴をもつ甕の破片が4個体分出土していることから、SB1の最終的な時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

SB1と重複しているSB2から出土した壺(6)は、頸部から外反した擬口縁部にやや内傾する口縁部を付加し、口縁端部は平らにおさめている。口縁部外面に数条の凹線が施されている。内面は指頭による成形痕が残っており、頸部下半は横位のヘラ削りである。これらの特徴から、弥生時代後期後葉に属すると考えられ、SB1が古いといえる。ほかのSB3~5についても後期の範疇に収まると思われる。F区のSB7からも同時期と思われる甕片が出土している。

また、A・F区調査区内からは弥生時代前期末の土器片、B区調査区内からは小型の磨製石斧が出土している。

調査の結果、弥生時代の住居跡は、小尾根の傾斜変換点付近にあたるA-1区・F区周辺で確認したにすぎないが、住居跡は等高線に沿って広がるのが充分考えられ、さらにA-1区の北西側にも延びる可能性がある。これらの集落は面として広がるのではなく、居住地が点在し同一場所で展開した小集落であったと考えられる。縄文土器や弥生時代前期の遺物が出土しているが、すくなくとも弥生時代中期以降に入って、いわゆる集落として機能し始めたと思われ、後期に至って本格的な集落として形成されたと考えられる。

遺跡の立地する場所は、南に開けた緩斜面上にあり、三篠川の河岸段丘を前面にひかえた立地

からも居住地としては適地であったことが窺え、生産基盤と推定される可耕地は、遺跡の南側を流れる三篠川周辺までを想定できる。

### その他の遺構と遺物

縄文時代と古墳時代の遺構は確認されなかったものの、C区から縄文土器片がまとまって出土し、F区からは縄文時代に属すると思われる石器が1点出土している。土器は、すべて小片で器形を窺えるものはないが、口縁部に縄文を施したもの、磨消縄文のもの、口縁部を著しく肥厚させた縁帯文土器、巻貝による凹線を施したものや無文の粗製土器などがあり、おおむね後期に属するものと考えられる<sup>(2)</sup>。町内で縄文土器が確認されたのは初例である。これらの土器と石器は全て流れ込んだものと思われるが、磨耗がみられないことから、本遺跡より高位である北側周辺の山裾付近に縄文時代後期の遺跡が存在する可能性が高い。また、各調査区内から山陰系の古式土師器や前期と思われる土師器の甕など出土しているが、須恵器はほとんどみられない。このことから古墳時代前期の集落は弥生時代後期の周辺に存在している可能性が高いが、遺跡周辺の丘陵には多数の古墳が存在していることから、古墳時代後期の集落も存在していたと思われ、後期の集落はやや離れた北側にあったと推測される。

今回の発掘調査では、三篠川の河岸段丘に向けて広がる弥生時代の小規模な集落を確認することができ、本地域における弥生時代中期以降の様子的一端を窺うことができた。また、縄文時代からの生活の痕跡が想定できるが、基本的には弥生時代以降、中世まで断続的に集落が形成されたことが窺われる。町内においては、まだ、弥生時代の集落や墳墓の確認は少なくその実態は明らかでない。今後、三篠川・戸島川流域における弥生時代の集落のあり方を探るうえで今回の調査結果は良好な資料を提供したと考えることができる。また、他地域における弥生時代後期の様相と比較にいたらなかったが、調査例の増加を待つ今後の課題としたい。

### 註

(1) 弥生土器の時期については以下を参考にした。

妹尾周三「安芸地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社 1992年

(2) 鎌木義昌編「9 瀬戸内」『日本の考古学 II 縄文時代』河出書房新社 1965年



a SB1 遺物出土状況  
(北東から)



b SB1 出土遺物  
(西から)



c SB1 完掘  
(北東から)

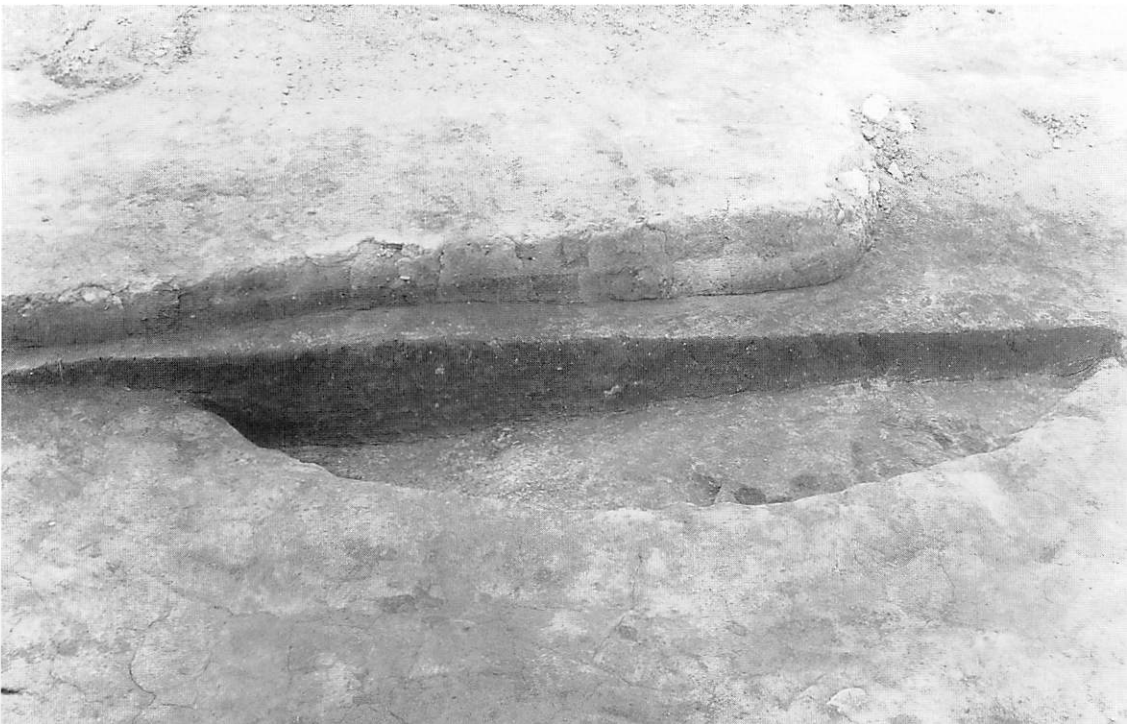




a SB 2 土層断面  
(北から)



b SB 2 完掘 (南から)



c SB 3 完掘 (西から)



a SB4完掘(南から)



b SB5, SX1完掘  
(南から)



c SB1~4完掘  
(北から)



a A-2区全景  
(北から)



b SK1完掘 (東から)



c SK1遺物出土状況  
(北東から)



a SK 2・3完掘  
(北から)



b SK 2～5完掘  
(東から)



c A-3区全景  
(南から)



a B-1区全景  
(北から)



b SK7~9完掘  
(南東から)



c SK10完掘(東から)



a SK 11 完掘  
(南西から)



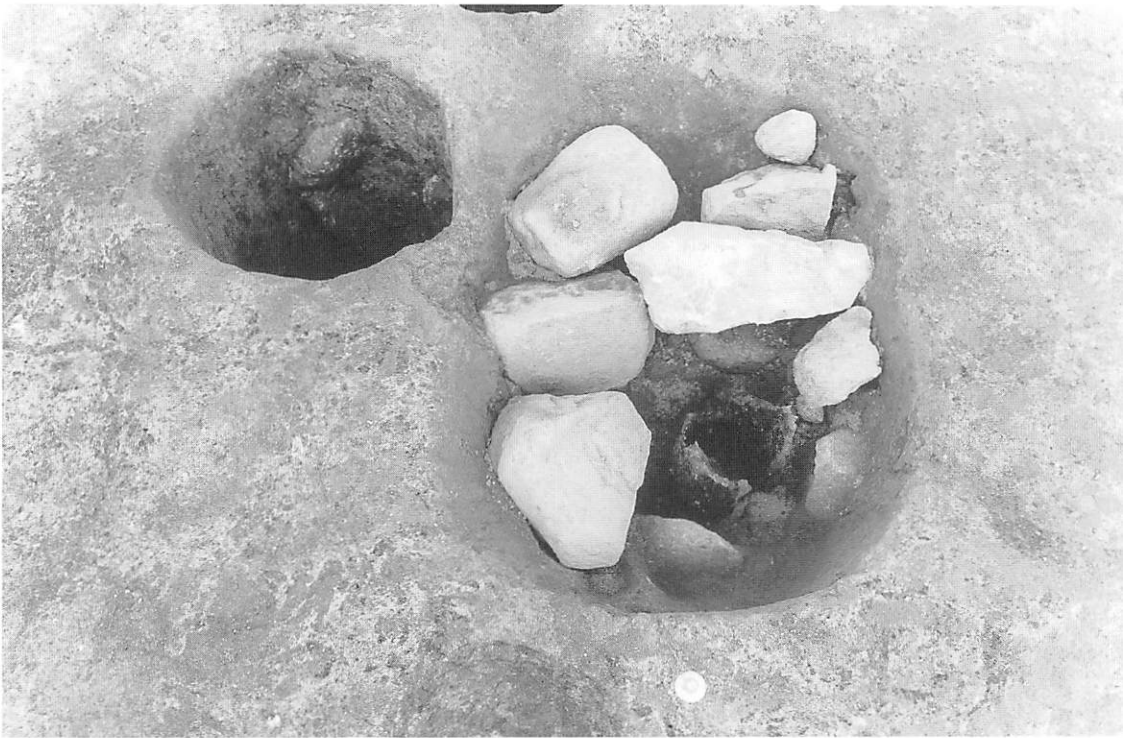
b SK 12 完掘 (南から)



c B-2 区全景  
(北から)



a SB 6 完掘 (北から)



b SB 6 柱材検出状況  
(東から)



c SK 13 ~ 15 完掘  
(北東から)



a SK 16・17 完掘  
(南から)



b SK 18 完掘  
(南西から)

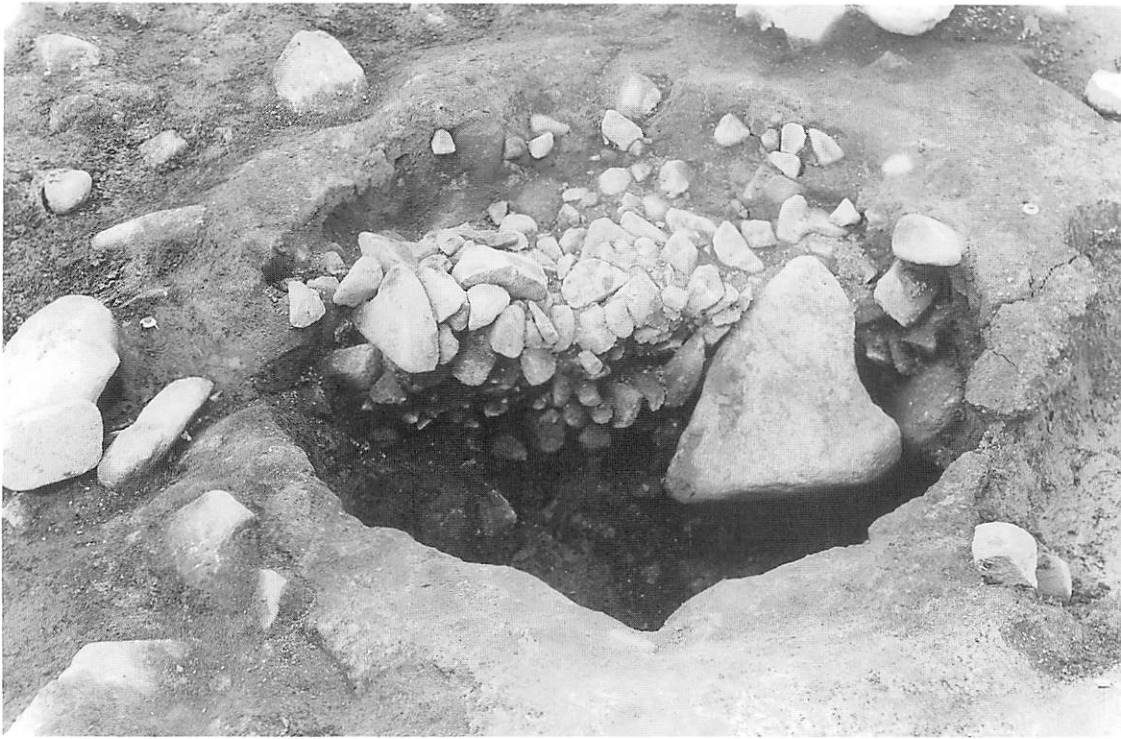


c SK 19・20 完掘  
(北から)





a SK 22 検出状況  
(北から)



b SK 22 土層断面  
(北から)



c SK 22 桶検出状況  
(北から)



a SX2完掘  
(南西から)



b SX3完掘 (東から)



c SX4完掘  
(北東から)



a SK 23 完掘(南から)



b SK 24 完掘  
(北西から)



c B-3区柱穴遺物  
出土状況(北から)



a C区全景 (南から)



b 作業風景



c 遺跡見学風景  
(向原小学校)



a D区全景 (北から)



b SK 25 検出状況  
(南から)



c SK 25 完掘 (南から)



a E区東半部礎検出状況  
(北西から)



b SX 6 断面 (南から)



c SX 6 完掘 (南から)



a SX5 礫検出状況  
(北から)



b SX5 断面 (西から)



c SX5 完掘 (南から)



a SK 26 完掘 (南から)



b SK 27 完掘 (北から)

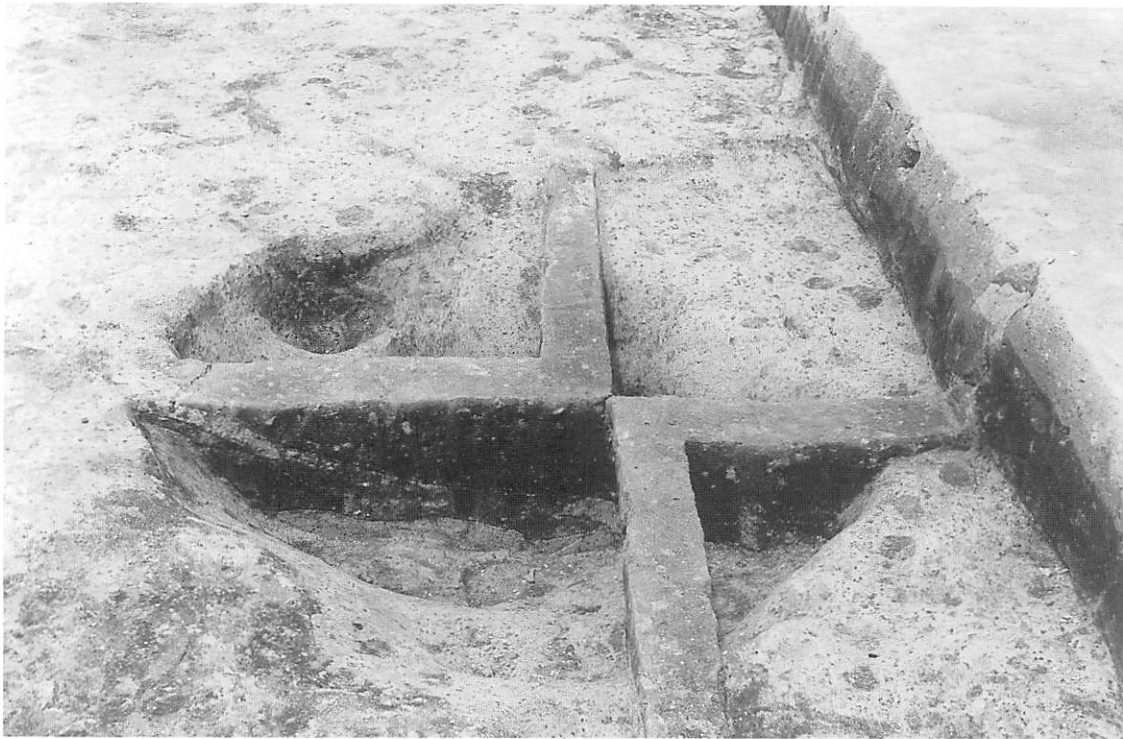


c E区全景 (東から)





a SB7 貼床検出状況  
(南から)



b SB7 炉跡土層断面  
(東から)



c SB7 完掘 (東から)



a SX 7完掘 (北から)



b SB 8完掘 (南から)



c SB 9土層断面  
(東から)



a SB9, SX8  
土層断面（北から）



b SB9, SX8完掘  
（西から）



c SB9, SX8・9  
完掘（西から）



a SX9完掘(西から)



b SB10完掘(南から)

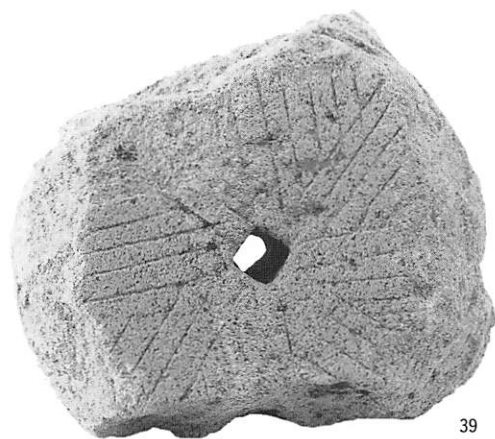
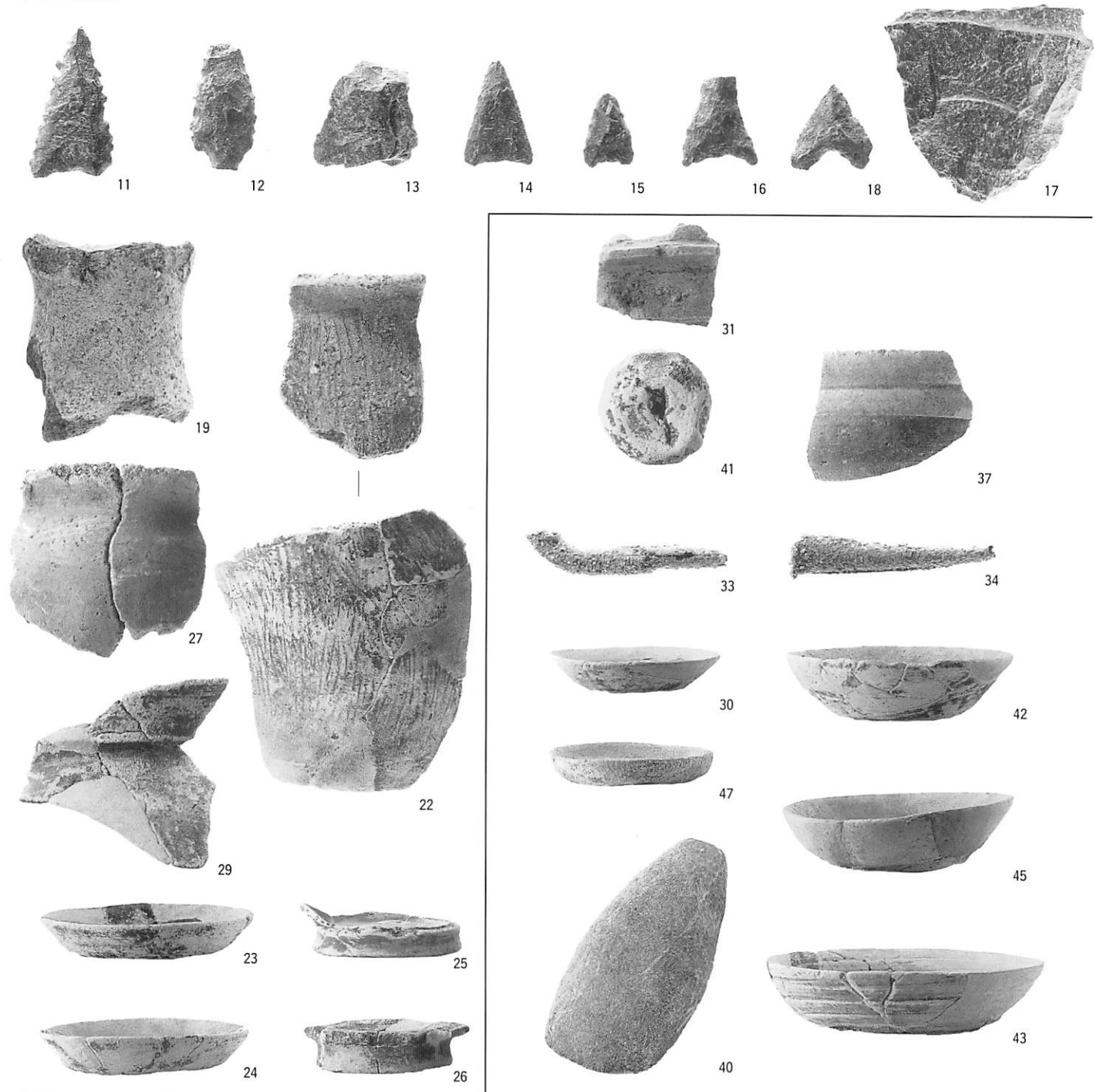


c F区全景(東から)



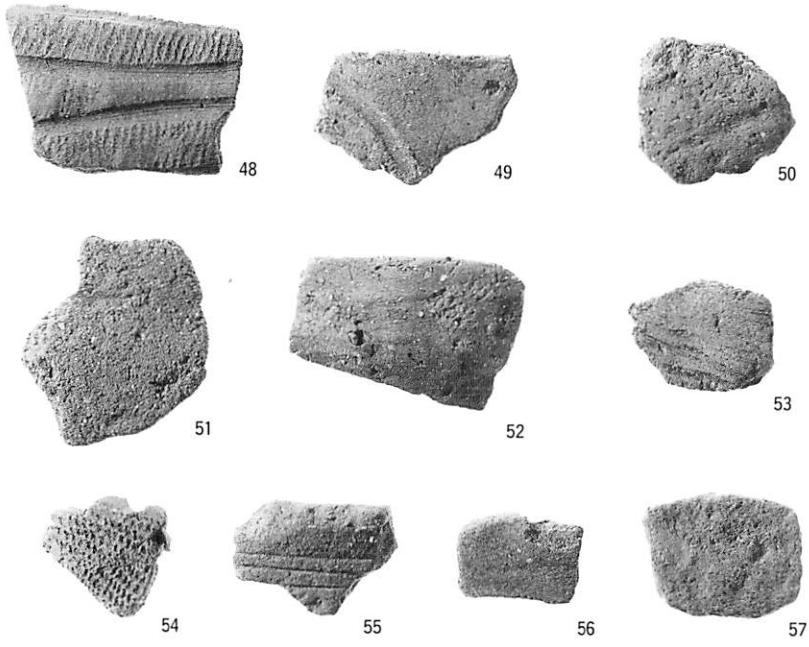
A区出土遗物

A区出土遗物

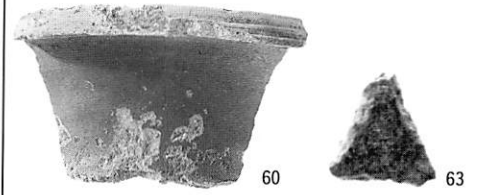


B区出土遗物

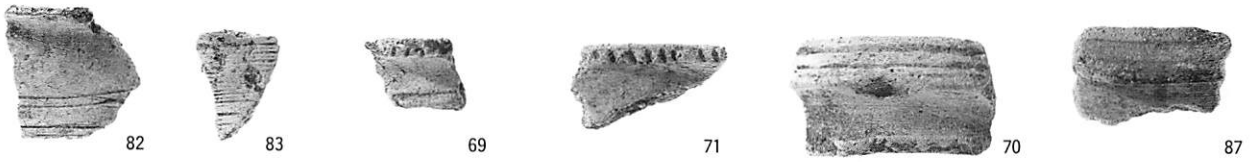
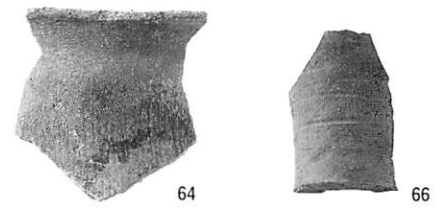
C区出土遗物



D区出土遗物



E区出土遗物



F区出土遗物

## 報告書抄録

ふりがな	さかななかぐみいせき							
書名	坂中組遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第195集							
編著者名	片岡由起子							
編集機関	財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8-49 TEL 082-295-5751							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
坂中組遺跡	広島県高田 郡向原町坂 12番地ほか	34386	155	34° 36' 27"	132° 43' 42"	19990524～ 19990903 20000410～ 20000527	1999年度 1,300m <sup>2</sup> 2,000年度 550m <sup>2</sup>	県営ほ場整備事業(向原地区)に係る発掘調査
	所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
坂中組遺跡	集落	弥生 中世 近世	竪穴住居跡 9軒 掘立柱建物跡 1棟 柱穴群 土坑 28基 性格不明の遺構 9基		弥生土器 須恵器 土師器 土師質土器 石鏃			

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第195集

### 坂中組遺跡

発行日 2001(平成13)年3月31日

編集・発行 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号  
TEL (082) 295-5751

印刷所 アートハウス株式会社